

## 下之郷遺跡・法養寺遺跡

—犬上郡甲良町下之郷・法養寺所在—

平成2年3月

滋賀県教育委員会  
財団法人滋賀県文化財保護協会

## 下之郷遺跡・法養寺遺跡

—犬上郡甲良町下之郷・法養寺所在—

平成2年3月

滋賀県教育委員会  
財団法人滋賀県文化財保護協会

## 序

滋賀県教育委員会では、活力のある県民社会、生き甲斐のある生活を築くための一つとして、文化環境づくりに取りくんでいます。特に文化財保護行政にたずさわるものとして、近年の社会変化に即応し県下の実情や将来あるべき姿を見定めつつ、文化財の保護と活用に努めております。

先人が残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力を得なければなりません。

ここに、平成元年度に実施しました県営ほ場整備事業に係る発掘調査の結果を取りまとめましたので、御高覽のうえ今後の埋蔵文化財の御理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力を頂きました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く御礼申し上げます。

平成2年3月

滋賀県教育委員会

教育長 西池季節

## 例　　言

1. 本書は平成元年度県営ば場整備事業に伴う犬上郡甲良町下之郷遺跡・法養寺遺跡の発掘調査報告書であり、平成元年度に発掘調査したものである。
2. 本調査は県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 発掘調査にあたっては、甲良町教育委員会・彦根県事務所土地改良課の諸機関および地元の協力を得た。
4. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについてはば場整備基準杭を基準としている。
5. 本事業の事務局は次のとおりである。

平成元年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	伊香 照男
〃 課長補佐	小川 啓雄
埋蔵文化財係長	近藤 滋
〃 主任技師	田路 正幸
管理係主任主任	山出 隆

財団法人滋賀県文化財保護協会

理事長	吉崎 貞一
事務局長	中島 良一
専門員兼企画調査課長	林 博通
調査第一係長	大橋 信弥
〃 主任技師	用田 政晴
総務課長	山下 弘

6. 試掘調査は昭和63年度を行い、現地発掘調査および整理・報告は用田が担当した。
7. 出土遺物および写真・図面等については滋賀県教育委員会で保管している。

## 本文目次

### 序

### 例　　言

### I. はじめに

1. 遺跡の位置と環境 .....	1
-------------------	---

### II. 下之郷遺跡

1. 調査の経過 .....	6
----------------	---

2. 調査の結果 .....	6
----------------	---

(1) A区 .....	6
(2) B区 .....	13
(3) C区 .....	13
(4) D区 .....	13
(5) E区 .....	13
(6) F区・G区 .....	19
(7) H区 .....	19
(8) I区 .....	22

3. まとめにかえて .....	33
------------------	----

### III. 法養寺遺跡

1. 調査の経過 .....	34
----------------	----

2. 調査の結果 .....	35
----------------	----

## 図版目次

### 下之郷遺跡

- 図版1 調査前近景、調査状況（A区）  
図版2 A区遺構検出状況、A区遺構  
図版3 A区D1・D2、A区遺構  
図版4 A区プレハブ跡地、A区H1  
図版5 A区H1カマド(1)、A区H1カマド(2)  
図版6 A区D1（南流）西端、A区D1（北流）西端  
図版7 A区FP1、A区FP2  
図版8 B区遺構  
図版9 C区遺構  
図版10 D区遺構  
図版11 E区遺構  
図版12 E区遺構西半、F区遺構  
図版13 F区遺構、G区遺構  
図版14 H区遺構北半、II区遺構  
図版15 H区B1、II区P7土師器出土状況  
図版16 I区遺構、I区遺構北半  
図版17 I区遺構、I区遺構西半  
図版18 I区遺構南端、I区遺構北端  
図版19 I区D1北半、I区D1南端  
図版20 I区D1と火葬場との位置関係、I区D2  
図版21 I区B1、I区B2・B3  
図版22 I区FP1、I区FP2  
図版23 I区西の下之郷火葬場、I区D1出土遺物  
図版24 I区D1出土瓦  
図版25 A区・I区出土遺物  
図版26 I区D1、A区D2出土遺物

### 法養寺遺跡

- 図版27 調査前近景、調査状況  
図版28 遺構  
図版29 遺構西半、遺構東半  
図版30 D1、D1底遺物出土状況  
図版31 D2、西端落ち込み  
図版32 出土遺物

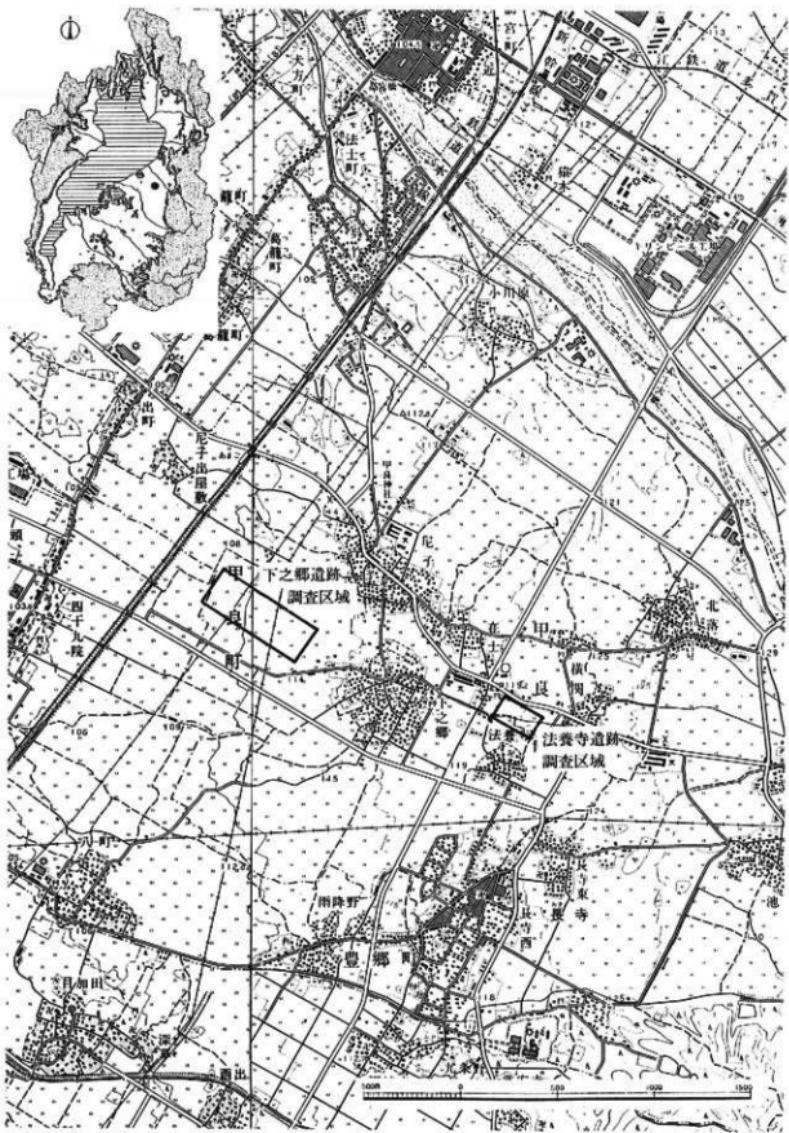
## 挿 図 目 次

### 下之郷遺跡

第1図 位置図	1
第2図 試掘調査トレンチ配置図	3・4
第3図 試掘調査トレンチ土層柱状図	5
第4図 発掘調査トレンチ配置図	7・8
第5図 A区遺構図	9・10
第6図 H 1 遺構図	11
第7図 D 1 西端断面図	11
第8図 D 2 断面図	12
第9図 F P 1 遺構図	12
第10図 B区遺構図(1)	14
第11図 B区遺構図(2)	15
第12図 C区・D区遺構図	16
第13図 E区遺構図	17
第14図 A区・D区・E区出土遺物	18
第15図 F区・G区遺構図	20
第16図 H区遺構図	21
第17図 I区遺構図	23・24
第18図 B 1 遺構図	25
第19図 B 2・B 3、F 2・F 3 遺構図	26
第20図 F P 2 遺構図	27
第21図 H区・I区(土壤)出土遺物	28
第22図 I区(土壤)出土遺物	29
第23図 I区(D 1)出土遺物	30
第24図 小字「寺ノ内」周辺図	32

### 法養寺遺跡

第25図 試掘調査トレンチ配置図	34
第26図 試掘調査トレンチ土層柱状図	35
第27図 発掘調査トレンチ位置図	36
第28図 調査区遺構図	37
第29図 D 1 南壁、D 2 北壁断面図	38
第30図 法養寺遺跡出土遺物	38



第1図 位置図

## I. はじめに

本報告書は、平成元年度県営ほ場整備事業（甲良南部地区下之郷工区および法養寺工区）に伴う犬上郡甲良町下之郷遺跡および法養寺遺跡の発掘調査の成果である。

調査にあたっては、関係諸機関をはじめ地元甲良町下之郷の方々の御協力をいただいた。

### 1. 遺跡の位置と環境

下之郷遺跡<sup>(1)</sup>は、犬上郡甲良町下之郷地先に、法養寺遺跡<sup>(2)</sup>は同町法養寺地先に所在し、「和名類聚抄」にいう犬上郡甲良郷にあたる。両遺跡は犬上川の形成した扇状地上、犬上川左岸に位置し、扇状地形のほぼ扇尖部に立地する。現在、犬上川はその流路を扇状地上のやや北に寄った位置に定めているが、扇尖部から犬上川の旧河道が扇状地上のほぼ全域に分流しており、扇状地の形成期においての犬上川の氾濫の繰り返しが偲ばれる。現状は、両遺跡共、一部集落に重なるがその大半は水田である。

この両遺跡の周辺において、犬上川左岸扇状地上の扇尖部ないし扇端部という同じような立地にある遺跡として、甲良町長畠遺跡<sup>(3)</sup>、尼子南遺跡<sup>(4)</sup>、豊郷町四十九院遺跡<sup>(5)</sup>、雨降野遺跡<sup>(6)</sup>が知られる。いずれも7、8世紀代を中心とする集落遺跡であり、これら6つの遺跡の動向に、犬上川左岸扇状地の開発過程を見ることができる。

この地域の近くでは、縄文時代の遺跡とされる金屋遺跡や、古墳時代中期および後期の古墳群が知られているが、集落遺跡としてその内容が明らかになっているものは確認されていない。従って、現在の知見としては、7世紀代における下之郷遺跡を中心とした、尼子南遺跡、法養寺遺跡、四十九院遺跡、雨降野遺跡における竪穴住居跡によって構成される集落遺跡の突然の出現により、この地域の開発が扇状地の南端部を中心に開始されたと考えられている。

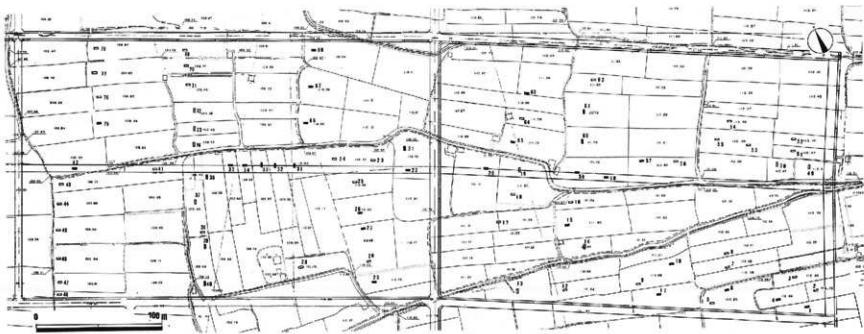
その後、集落構成は8世紀前半代の竪穴住居跡と掘立柱建物が共存するものから、8世紀後半の掘立柱建物のみからなるものへと変遷し、8世紀後葉に扇状地南部での古地割とされる南北地割（N 5°W）に規制された集落の成立や、12世紀後葉の扇状地北部での方格地割（N 27°~28°E）に規制された集落の成立という展開を見せる。これらのことから、この地域は7世紀の中葉に南部を中心に開発が始まり、徐々に北部へ開発が進展し、9世紀以降、本格的な開発が扇状地全域に広がったと考えられている。

註 (1) 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会「犬上郡甲良町下之郷遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X III-2』1986年

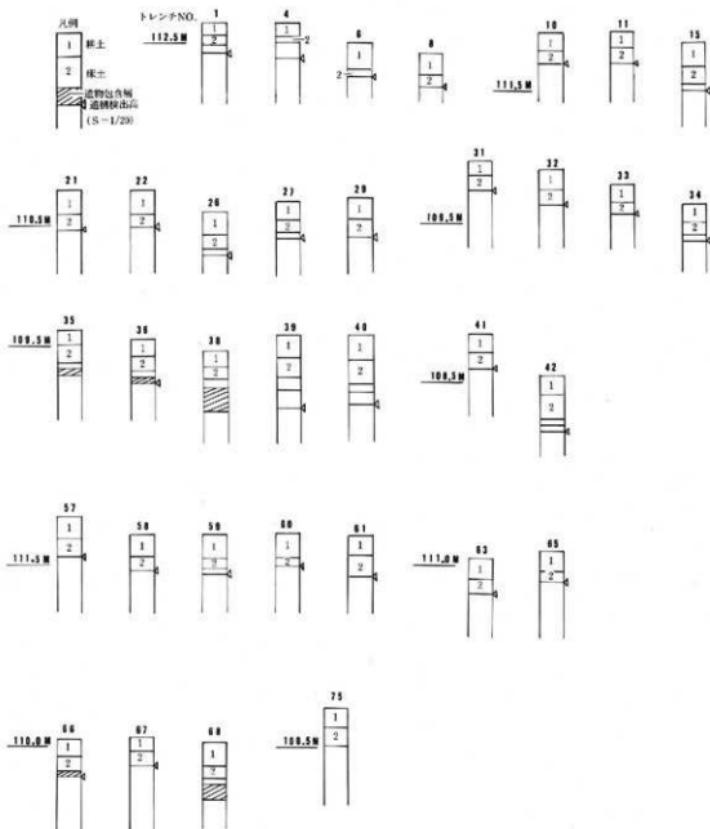
滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会「犬上郡甲良町下之郷遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X IV-2』1987年

滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会「犬上郡甲良町下之郷遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X V-2』1988年

- 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会「犬上郡甲良町下之郷遺跡・法養寺遺跡」「県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書V」1988年
- (2) 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会「犬上郡甲良町法養寺遺跡」「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X-1」1985年  
滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会「犬上郡甲良町法養寺遺跡」「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XII-1」1985年  
滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会「法養寺遺跡発掘調査報告書」1984年  
滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会「犬上郡甲良町下之郷遺跡・法養寺遺跡」「県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書V」1988年
- (3) 萩野泰樹「滋賀県長畠遺跡」『日本考古学年報36』日本考古学協会1986年
- (4) 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会「尼子南遺跡発掘調査概要I」1985年  
滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会「尼子南遺跡発掘調査報告書」1989年
- (5) 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会「犬上郡豊郷町四十九肱遺跡」「ほ場整備関係道路発掘調査報告書XII-2」1987年
- (6) 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会「犬上郡豊郷町雨降野遺跡」「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XII-1」1985年
- (7) 宮崎幹也「犬上川左岸扇状地における律令期集落の発生と展開」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要2』滋賀県埋蔵文化財センター 1988年



第2図 試掘調査トレンチ配置図



第3図 試掘調査トレンチ上層柱状図

## II. 下之郷遺跡

### 1. 調査の経過

甲良町下之郷地先において、県営は場整備に伴う発掘調査が昭和59年にはじめて実施されて以降、数次にわたり下之郷集落の縁辺部において調査が実施されてきた。

今年度は下之郷集落の北西部、約12haが工事予定区域となっており、下之郷遺跡および一部尼子南遺跡の範囲に当該地域が含まれるため、工事計画に沿った試掘調査は、昭和63年度に実施した。

試掘調査は平成元年3月1日から31日までの間に実施し、排水路および切土計画部分において約 $2 \times 3$ m試掘トレンチを78個所設定した。その結果、35個所において、基本的に表土(耕作土)約20cm、床土(黄灰色粘土質土)約10cmの直下で造構面ないし遺物包含層が検出された。その試掘調査結果をもとに県教育委員会が県農林部と遺跡保存の協議を行い、可能な限りの設計変更が行われたが、約3,900m<sup>2</sup>部分については事前の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存資料を得ることとなった(第2図、第3図)。

現地での発掘調査は、平成元年5月25日に開始し、8月初旬に、同じく県営は場整備に伴う法義寺遺跡の調査をさみながら、9月4日に調査を終了した。その後は、随時、整理調査作業を実施した。

### 2. 調査の結果

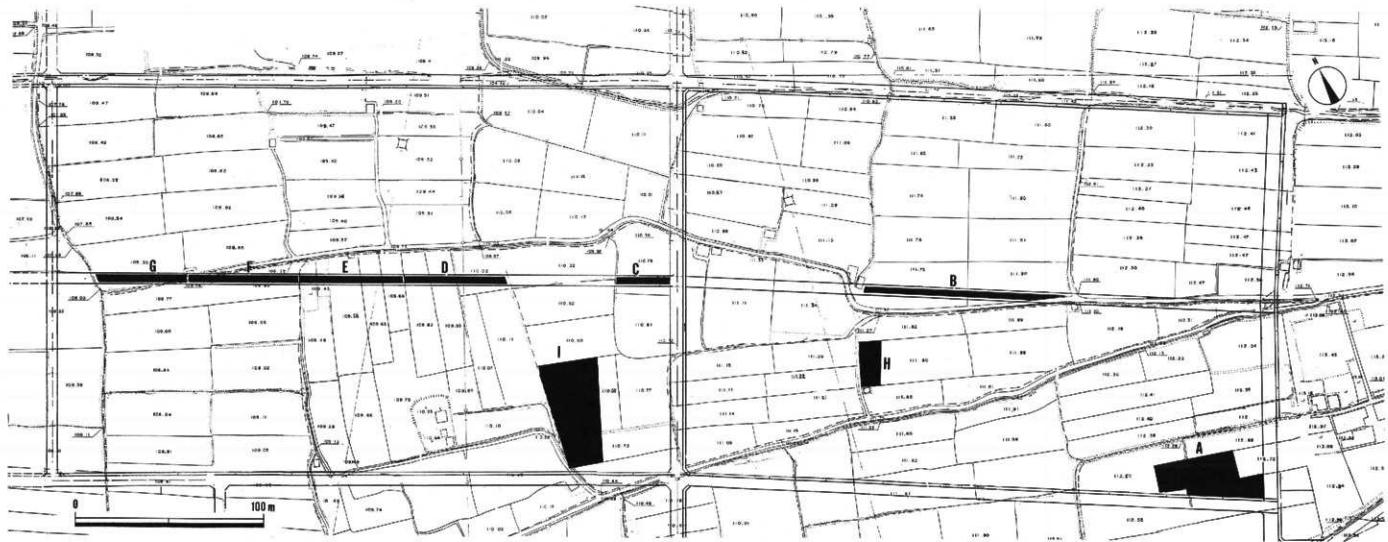
#### (1) A区

工事予定区域内の南東隅にあたるH面切土計画部分に相当する。調査区を東西に2条の溝がほぼ平行して走り、南隅に堅穴住居跡が1軒検出された。その他、径20~30cmを中心とする土壙が多数認められたが、掘立柱建物等として復元できるものはなく、D1中ほどのFP1とその南のFP2と称した、内側が赤化した方形土壙が目を引く程度である。

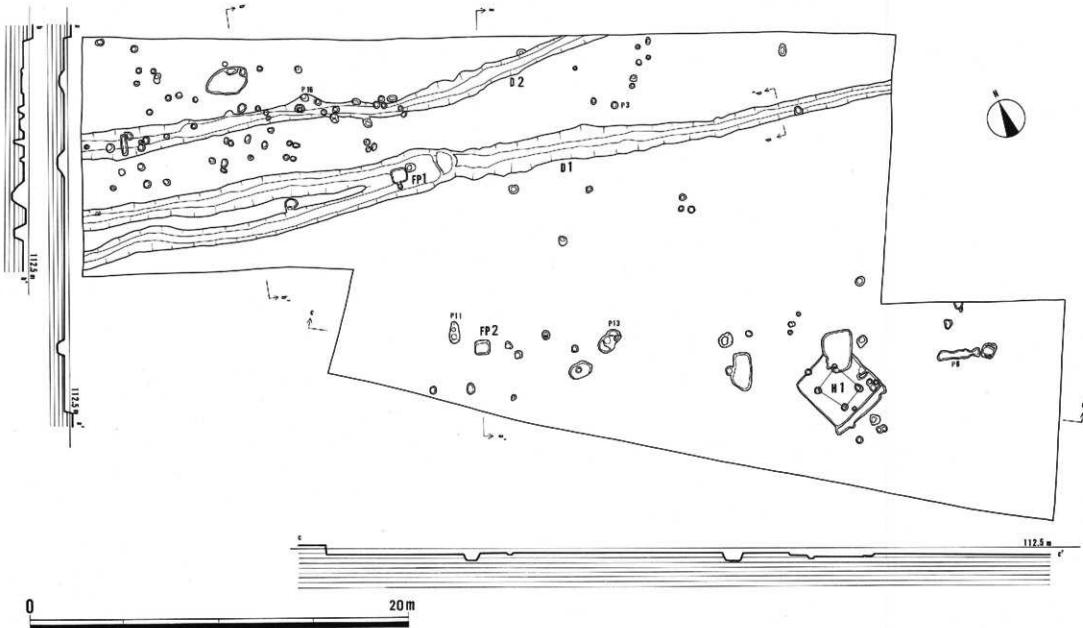
基本層位は、厚さ28~31cmの耕土下に暗茶褐色ないし灰黄褐色土からなる床土が広がる。これを除去すると黄褐色土からなるベースが広がり、この面から造構群が掘り込まれて残る。造構内埋土はほぼ暗茶褐色土である(第5図)。

D1 東から西へ流れる幅0.6~1.2m、深さ0.2~0.8mの断面台形を呈する溝で、西に行くに従い深さを増し、途中、流れは2つに分かれる。その分流部分にFP1と称した方形土壙が残るが、溝埋土内中位を掘削中にすでに焼けて赤化した土壙の壁の立ち上り部分が一部認められたため、溝D1に伴うものではなきようである。なお、その手前2m付近で、2つの段が残り、水が流れればゆるやかな滝状を呈する形態を残す。

D2 D1の北側でほぼ平行して走る溝で、幅はD1と同程度であるが、深さは0.2~0.5mとやや



第4図 発掘調査トレーニ配置図



第5図 A区遺構図

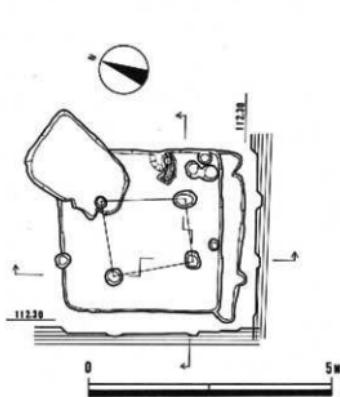
浅い。特にその西半部分の周辺に遺存する土壙群は、溝を切っており、D 1 と F P 1 と同様に、この2本の溝が埋まってから掘られたものである。

なお、D 1 、 D 2 共、N80Wを測り、東西方向よりややずれる。

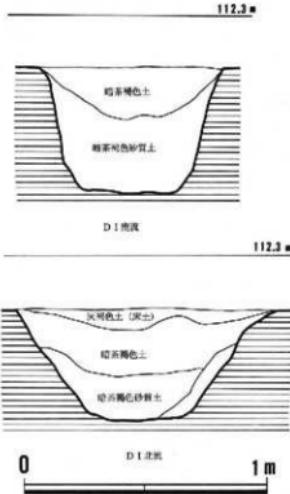
**H 1** A区南部分の方形竪穴住居跡で主軸はN24Wを指し、一辺3.30m四方、深さは13cmを計る。主柱穴を4本配し、北東コーナーは、埋土に灰釉陶器を含む新しい土壙に切られており、南辺には幅約40cmで床面は主床面より数cm高い張り出し状の部分が認められている。カマドは東辺中央に備えられているが、遺存状況は悪く、南側袖部および配石を2個残すだけである。このカマド付近で土師器甕2個体分を検出した。カマド周辺の赤化部分はN S約60cm、E W約70cmを計る梢円形に広がり、断ち割りも実施したが何ら付属施設は認められなかった(第6図)。

**F P 1** D 1 の中ほど分流地点にある平面方形の焼土壙で、長辺84cm、短辺61cm、現存の深さ18cmを測るが、先述のようにD 1 埋土の中位においてこの焼土壁を確認していたため、D 1 の埋土上面から掘り込まれていた可能性もある。主軸は東西方向、床面は平坦で焼けていないが、壁は四周とも厚さ2~3cmにわたって赤褐色化している。埋土は黄色砂土および茶褐色砂質土からなり、1~数cm大の軟らかい焼土塊および炭を含む。南辺や西寄りに28×18cmの梢円形小土壙があり、高さ12cm程度の壁を隔てて連結している。また、東側の平面54×40cmの梢円形土壙内埋土にも炭が相当量混じっており、この三者は一連の遺構と考えられる(第9図)。

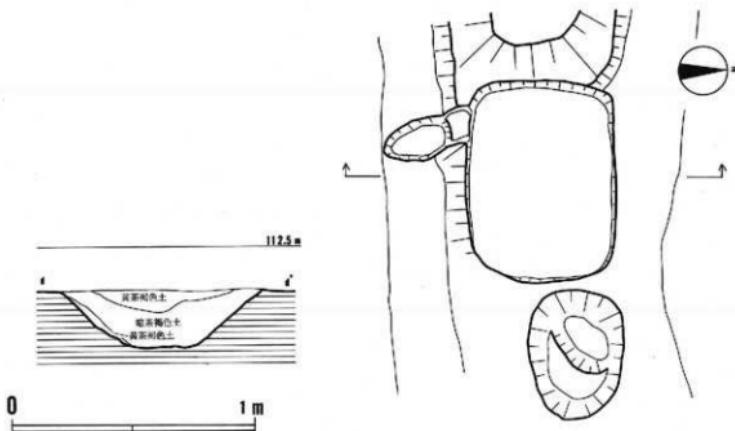
**F P 2** F P 1 の南約20m地点に位置する平面方形の焼土壙で、F P 1 と同様に埋土内に炭および焼土塊を含むが、平坦な床面は焼けていない。短辺70cm、長辺80cmを計り、現存する深さは約17cmである。主軸方位はN70Wを指し、F P 1 に近いものである。



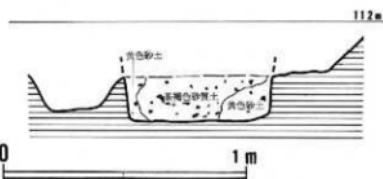
第6図 H 1 遺構図



第7図 D 1 西端断面図



第8図 D 2 断面図



第9図 F P 1 遺構図

**遺物 (第14図)** 1・2はH 1 カマド付近で出土した土師器壺で、1の内面はナデ、2の胴部内面はハケ目調整となっている。この2もほぼ完形であったが、体部片は相当破碎しており、復元不能であった。3は土師質を呈するが、須恵器坏身の生焼けかとも思われる。4はH 1 埋土内出土で、体部中ほどから上はやや外反氣味に広がる土師器坏で、5はH 1 を切る土壤内出土の灰釉陶器である。内面のみ灰釉が点々と残る。6～12はD 1 埋土出土器で、6～9は須恵器坏身、10は灰釉陶器、11・12は土師器の坏と碗。6は焼成不良品で、淡赤褐色を呈し、7も焼けひずみがひどい。8も受部直下に焼成時の焼きぶくれ痕が残り、9は底部外面にロクロから切り離す際の傷が残るなど不良品ばかりである。11の胎土は精良で、12の口縁端部内面には1条の沈線がめぐる。

13の須恵器坏蓋および14の土師器壺はD 2 東端の溝底部に正立して置かれていたもので、一括性が高い。14の胴部下半外面は、左上から右下方向にヘラ削りされており、内面はハケ調整であるが底部のみナデられている。

15～18は小土壤からの出土品で、15はP 3 出土の綠釉陶器、16はP 8、17はP 11出土の土師器坏、18はP 16出土の綠釉陶器である。16は内外面共かなり荒れており釉が少しだけ残存しているが、18は釉の遺存は良好で、共に高台疊付に段を残す。

その他、須恵器・土師器の破片が小土壤内から出土しているが、P 8 から山茶碗、P 13から灰釉陶器片が検出されている。

## (2) B区

A区の北約100m付近に位置するほぼ東西方向の排水路計画部分に設定したトレンチである。全長約102mの細長い調査区は、約30cmの表土下に約10cmの床土が広がり、その下層には暗茶褐色土からなるベースが広がる。その東半部分は、遺構は認められなかつたが、西半において、幅約10mの砂利土が埋まつた南北方向の旧河道を検出し、それを切つて径10~30cm程度の小土壤が見つかった。しかし、建物等の遺構を認められるには至らず、遺物もB区遺構面とP1埋土内で土師器甕片各1点を検出しただけであった(第10図、第11図)。

## (3) C区

B区から西約100mの同じく排水路計画部分に設けたトレンチで、延長28mの調査区である。こちも表土約30cmと床土約5cmを除去すると明茶褐色からなるベースに径20~40cmを中心とする小土壤を多数検出したが、遺物は遺構面で奈良時代と思われる土師器皿の破片が数点出土したのみであった(第12図)。

## (4) D区

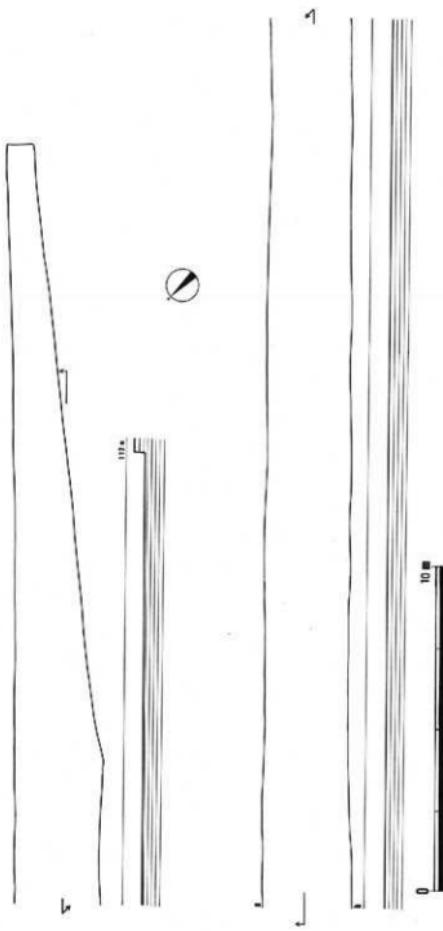
C区のさらに東約60m付近から始まる排水路計画部分に相当する調査区で、ここから西へE区、F区、G区と総延長約216mにわたつて調査トレンチが連続する。

D区としてはとりあえず延長約52m分を設定した。ここでは東端にD1と称した細長い溝状構を除いて、全て小土壤群が、表土と床土を除去した肩位において径10~30cmを中心とする規模で、多数検出された。D1は幅70~80cm、深さ5~8cm程度の浅くて細長い土壤で、主軸はN17°Eを測り、その西1.5mにある細長い土壤と直交するような位置関係にあるが、つながり等は不明である。掘立柱建物等は復元できず、遺物はD1から須恵器坏蓋1点、P1、P2からそれぞれ須恵器坏身1点(21・22)、それに遺構面から青磁碗1点(20)と土師器坏(19)、須恵器片が少景出土したのみであった。19の土師器坏および20の青磁は遺構面出土で、青磁の素地は灰色、釉調は緑色を呈する。21・22も含めて全て小破片である(第12図、第14図)。

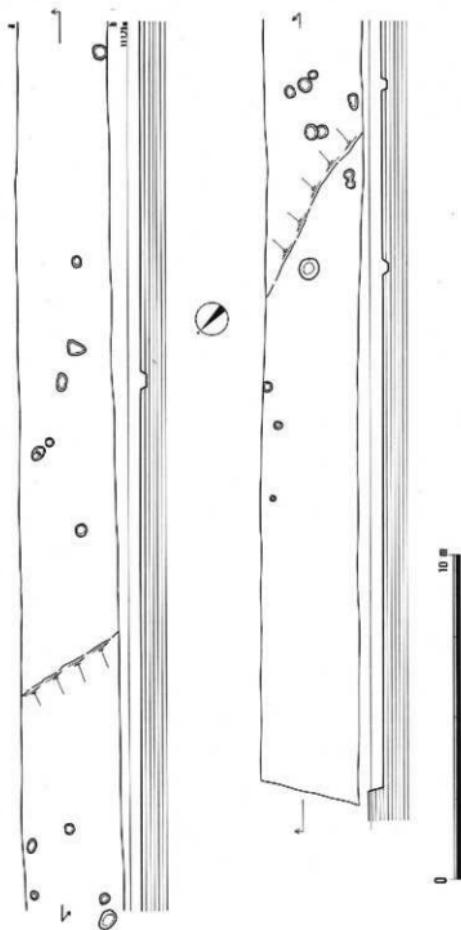
## (5) E区

E区はD区の西端から50cm・壁をはさんで西に位置し、延長約53.5mを測る。トレンチ中ほどに東西方向の溝(D1)が走り、その西端付近にも南北に溝(D2)が遺存していた。

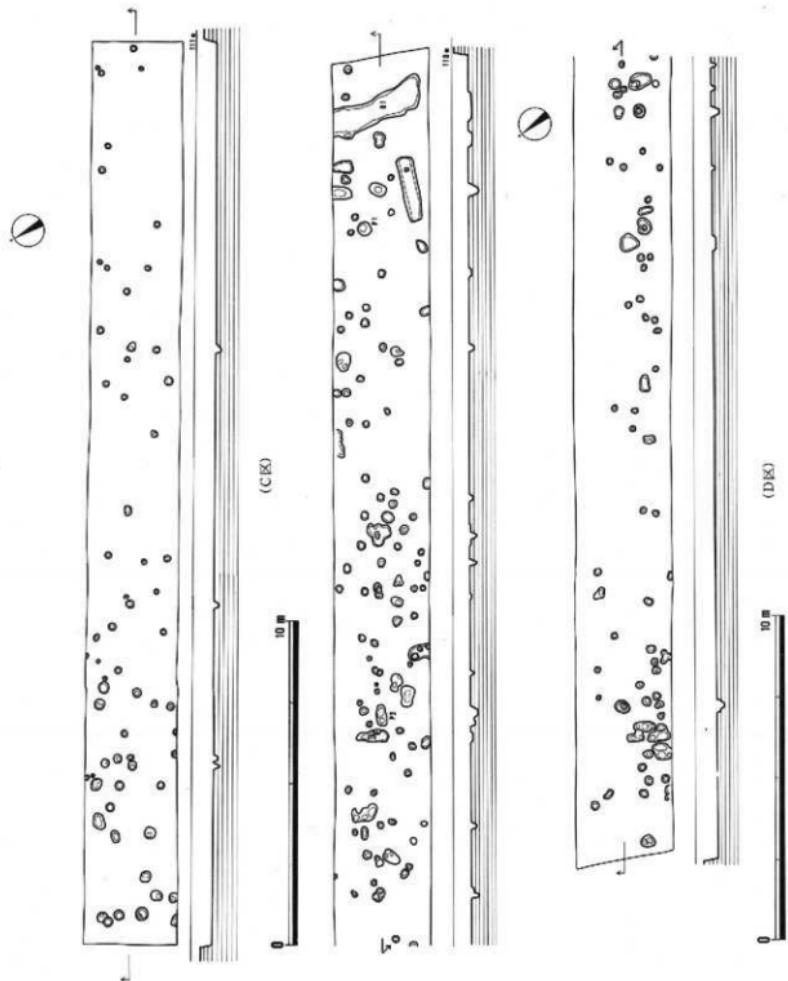
D1は幅80~140cm程度で、その東半部は深さ15~20cmと深く、西半部は3~8cmと浅い。途中、20cmほど途切れる部分がある。底は平底状を呈し、溝の方向はN65°Wを指す。D2は断面逆台形のしっかりした溝で幅50~60cm、深さは25cm程度である。主軸はN32°Eを指す。このトレンチ西端から約4mを測るところから西は、ベースが少し落ち込んでいく(第13図)。



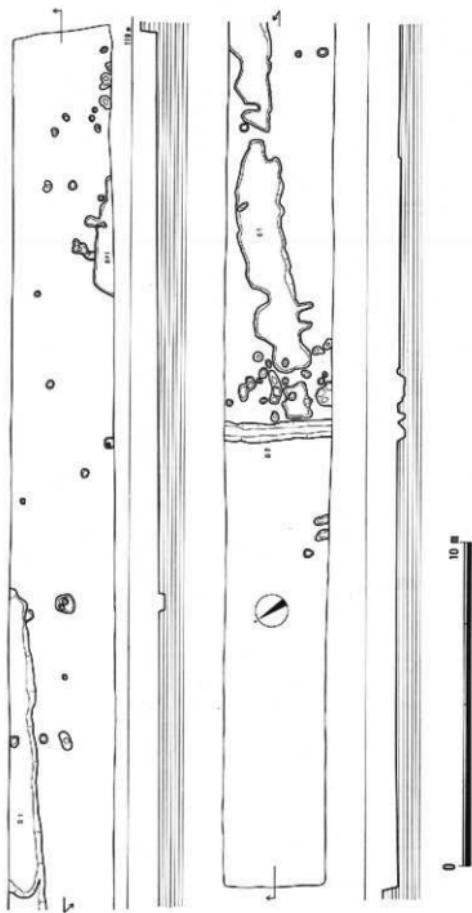
第10図 B区遺構図(1)



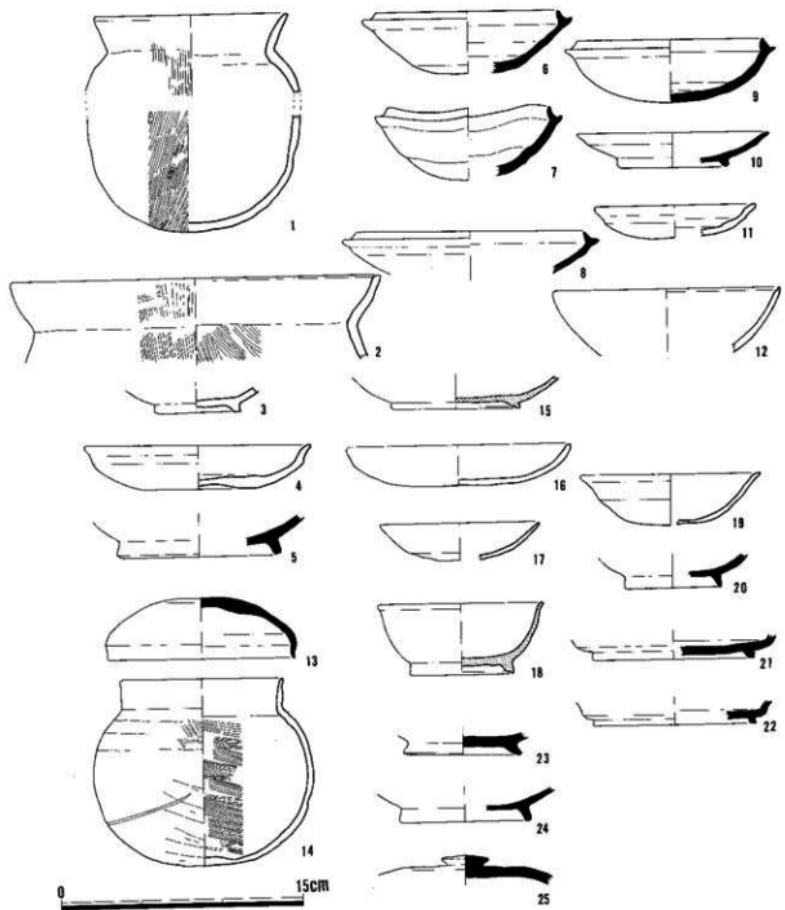
第11図 B区遺構図(2)



第12図 C区・D区遺構図



第13図 E区遺構図



第14図 A区、D区、E区出土遺物

23は遺構面出土、24はP 1出土の灰釉陶器、25はD 1出土の須恵器坏蓋で、全て小片である(第14図)。

#### (6) F区・G区

E区の西端との間に50cmの壁をはさんで西に設定した東西方向のトレンチがF区で、全長約58.5mを測る。調査区中ほどに幅約100cm、深さ約20cmで平底の溝がN66W方向に遺存する。それに沿って径10~20cm程度の小土壙が多数認められたが、遺物は皆無であり、これらは人為的なものでない可能性がある。このことはG区についても同様である。

G区はF区の西0.8m付近から西に設定した調査区で、延長約49mを測る。このトレンチあたりからベースは粘質土から粘土へと変化していき、特に西半部分は完全な青灰色粘土となる。遺物も認められなかった(第15図)。

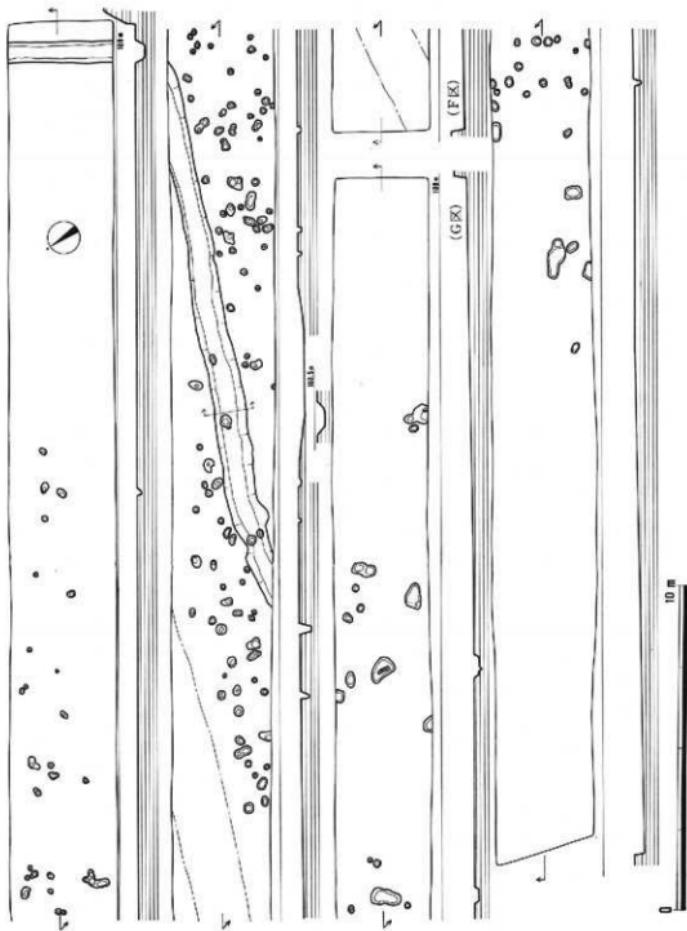
#### (7) H区

H区はB区の南約25m付近に位置し、24×12mの規模をもつ切土計画部分における調査区である。

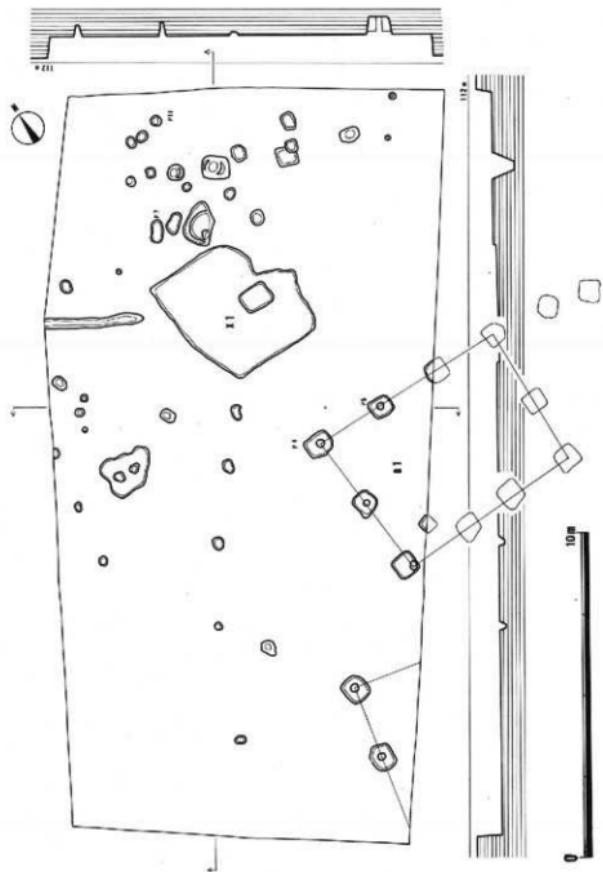
中ほどやや北寄りに4.0~3.5m程度の不定方形を呈する浅い(5~10cm)土壙があり、その南にB 1と称した3間×2間の掘立柱建物跡が検出された。そのさらに南西にも平面方形の柱穴が2箇認められ、これも掘立柱建物跡に相当すると判断された。B 1は調査区内において5つの柱穴しか認められなかったが、その南東部分は表土置き場用に表土(耕土)を一面に除去していただき、その建物の規模、柱の位置等を輪郭だけだが知ることができた。また、P 7は長径66cm、短径42cmの平面楕円形を呈する土壙であるが、ここで土師器の壺が横置きで検出された。半分は削平されていたが、口縁部を南西方向に向け、もとは完存していたようである(第16図)。

B 1 3間(6.7m)×2間(4.7m)の規模をもつ掘立柱建物跡である。主軸はN89Wとほぼ東西棟となっている。柱穴の掘方は全て方形で、1辺60~80cm程度のもの、柱痕跡は幅約20cmのものである。柱間は桁行が220cm、200cm、梁行は230cm、240cmを測る。

遺物 26はX 1 境土出土の須恵器坏蓋であるが、生焼けで、器表もかなり磨耗している小破片である。27はB 1 の柱穴であるP 4、28はP 4 の掘方内出土品で、須恵器坏身と坏蓋である。27の口縁端部は肥厚気味に処理され、内面に浅い沈線状のものが残る。29もB 1 の柱穴であるP 5掘方内出土の須恵器坏身で、高台は外方に向って少し立ち上り気味の小破片である。30はP 1 1出土の須恵器坏身片、31はP 7に埋められていた土師器壺である。胴部外面はハケの後ナデ、内面はナデ調整され、底部近くは指頭押圧が認められる。外反し、端部が少し肥厚気味の口縁内面にもヨコナナダが残る。その他の土壙、およびX 1 からも須恵器と土師器の小破片が10数個体分出土したが、全て奈良時代を中心とするものであった(第21図)。



第15図 F区・G区造構図



第16図 H区遺構図

## (8) I 区

I 区はD区の南約50mに位置する田面切土計画部分で、約690m<sup>2</sup>の平面台形の調査区である。調査区の西端に沿って南北に溝D 1が走り、中ほどで東西方向の溝D 2に切られている。D 2の北に3間×2間の掘立柱建物が1棟あり、南に2間×1間と3間×2間の掘立柱建物が検出された。またそれらの建物の柱跡と同程度の掘方をもつ柱穴列が3つ確認されたが、建物跡を復元するまでは至らなかった。

調査区南隅には細い溝と幅10~50cm程度のビットが多数検出されたが、埋土は一様で土壤底(黄褐色土ないし灰色砂土)は確認できるものの、遺構の壁は明確にできなかった。また異なる土壤間出土遺物が接合関係にあるなど、その諸関係・性格は不明である。一方、調査区北東隅にも同様の土壤群があり、A区で検出されたような平面方形の焼土壤も2基確認できた。

なお、I区の基本的な層位は、表土(耕土)および床土、約30cm除去すると黄褐色砂土ないし黄褐色粘質土からなる遺構面となる(第17図)。

D 1 I区の西辺に沿って南北に検出された溝で幅2.80~0.80m、深さ10~50cm程度を測り、南北の中ほど付近が最も浅く、その幅も狭い。溝の方向は少し北から東へずれ、およそN30°Eとなり、調査区西辺に沿って走る現況の溝および水山畔と平行する。特にその南端部分でいくつかの土壌に切られているが、埋土中の主たる遺物の時期に大差はないようである。埋土は北半においては茶褐色砂礫土、南半においてはそれが暗茶褐色土に変化する。この埋土中に赤褐色を呈する1~5cmの大・量の焼土塊が須恵器、十郎器、灰釉陶器、綠釉陶器および若干の瓦片に混って出土した。これは北半部において特に著しく、その量はコンテナ2~3箱分にもなった。表面は磨耗が激しく、瓦を人為的に細かく破碎したものも含まれる。また、いわゆる平瓦および丸瓦と判断できるものも、同様に磨耗しており、布日の庄痕等の器表観察もままならないものばかりで、光形品あるいはそれに近い個体は見つからなかった。特に、軒瓦類については図示した軒丸瓦の細片2点と軒平瓦1点が出土しただけであった。

D 2 調査区を東西に横切り、D 1を切る。その幅は0.8~1.2m程度、深さ30~35cmを測り、断面は逆台形となる。主軸はN83°Eを指し、西端部分で、近年の耕作溝に切られている。この溝の暗茶褐色砂礫土からなる埋土からは、遺物等は全く検出できなかった。

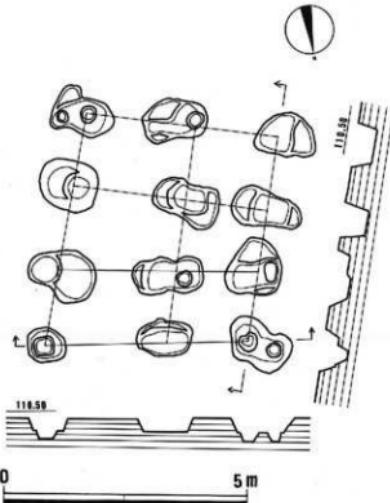
B 1 D 2の北側に位置する南北棟の掘立柱建物跡で、3間(4.25~4.80m)×(4.00~4.25m)を測り主軸はN17°Eを指す。平面の柱通りは少しゆがむが、柱穴とその掘方を備えており、周辺に小ビットしかないとして建物跡であることに間違いはない。掘方の平面形は不定形で、全体に南北に長い椭円形を呈するものが多いことから、柱を南北方向にゆすった抜き跡とも考えられる。また、補助的な柱穴も2個所認められた(第18図)。

B 2 D 2の南に位置する東西棟の掘立柱建物跡で、2間(4.75~5.00m)×1間(2.25m)を測り、主軸はN87°Wを指す。桁行の1本の柱跡を欠き、周辺の方形の掘方をもつ柱穴との関係も考えると、さらに大きな規模をもつ建物跡の可能性も残る。特にF 2・F3と称した柱列とは軸方向が合致し、少し離れるがF 4の軸方向とも直交する関係にある。柱跡の掘方は基本的に方形で、



第17图 I 区勘探图

およそ一辺1.0~1.4mを測る（第19図）。

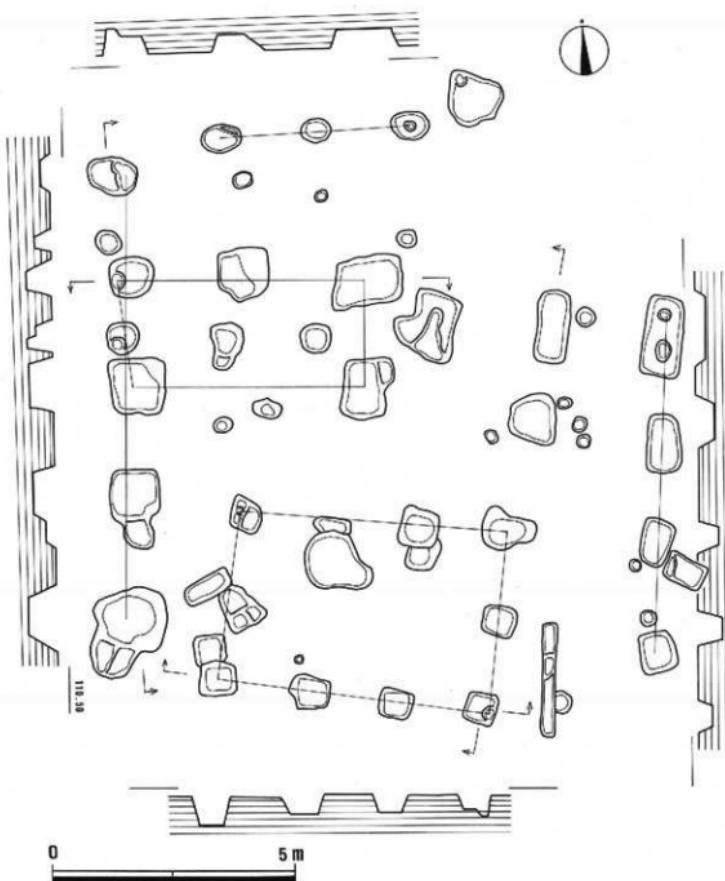


第18図 B1 遺構図

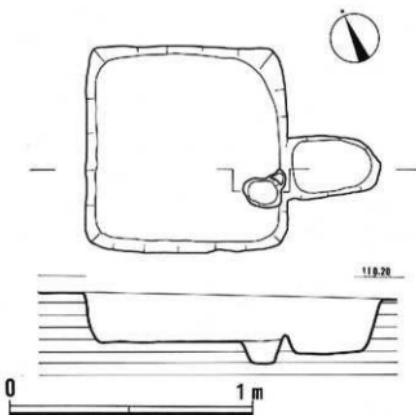
**B 3** B 2 のさらに南にある東西棟の掘立柱建物跡で、3間(5.45~5.55m)×2間(3.60~3.80m)を測り、主軸はN76°Wを指す。柱跡の掘り方平面形は方形で、一辺60cm程度を基本とするが、B 2 の掘り方に比べ小振りである。

**F P 2** 南北85cm、東西82cm、深さ20cmの平面方形の焼土壙で、東辺に高さ3cmばかりの壁をはさんで長径39cm、短径25cm、深さ22cmの平面楕円形の土壙を付属する。また、東辺の内側に接して径12cmの小土壙があり、少し張り出した段を通じて楕円形土壙と連続するようである。A区のF P 1、F P 2で見たように四周の壁だけ赤褐色に焼け、埋土には炭が点在していた。主軸方位はN67°Wを指す。

**F P 2** F P 1 の西方約11m地点にある焼土壙で、F P 1 と同様に平面形は方位を呈し、周囲の壁が赤化していた。南北82cm、東西80cm、深さ10cmを測り、底部はF P 1 などと異なり、火を受けて赤化していた。その底部は基本的に平坦であるが、東辺に接した部分から西へ20cmばかり張り出しがあり、少し西へ傾斜していた。やはり、埋土中に炭が点在していた（第20図）。



第19図 B2・B3、F2・F3造構図

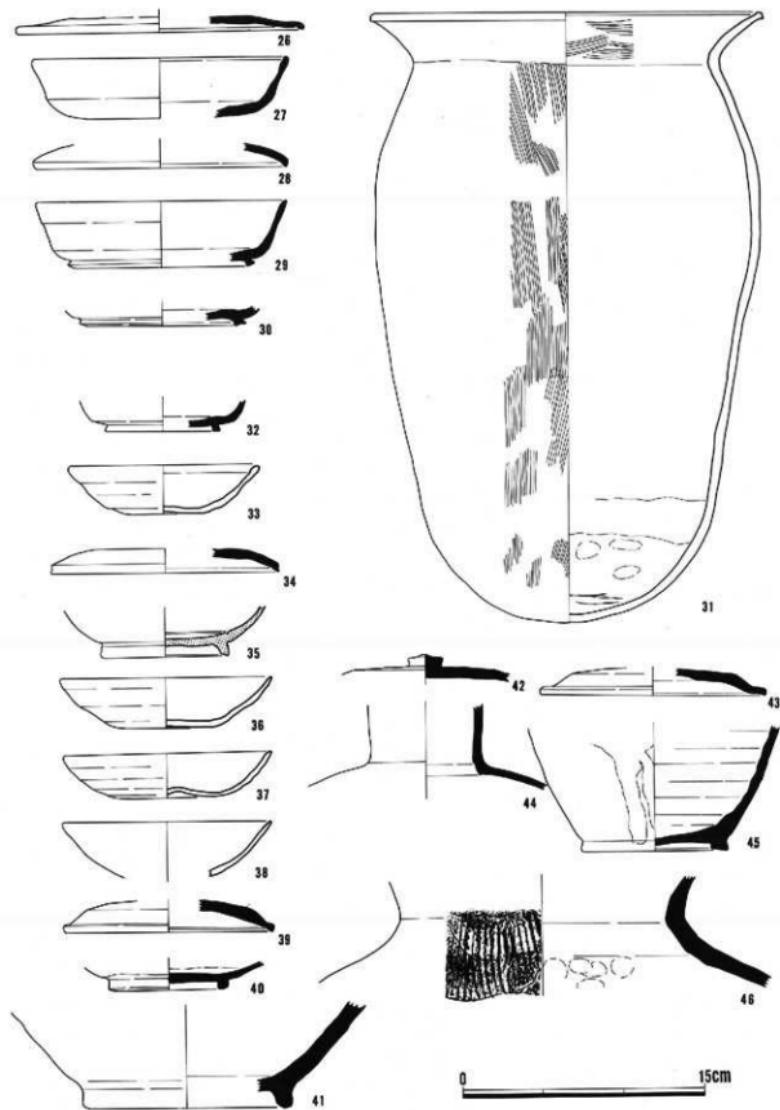


第20図 F P 2 造構図

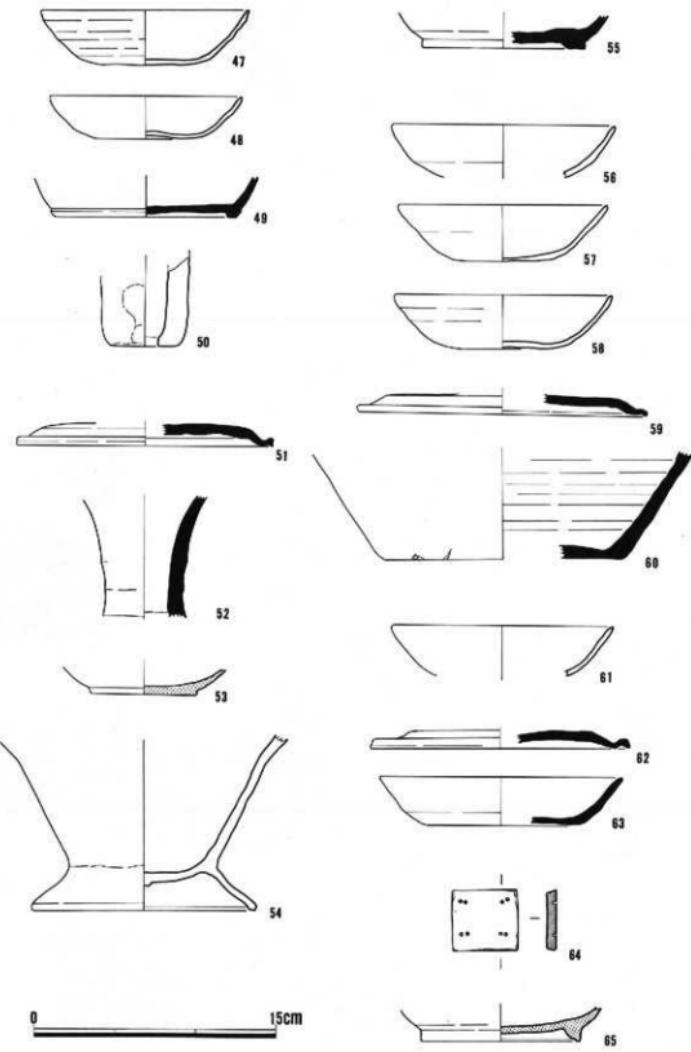
遺物 32~65はすべてI区のピット中の出土品である。32はP14の須恵器坏身片、33はP20出土の土師器坏で、口縁端部を一部肥厚しており、内外共に赤い化粧土がわずかに残る。また底部近くあら少し上方にかけ黒斑も見られる。34はP38出土の須恵器坏蓋片、35はP43出土の綠釉陶器である。高台置付部分は釉が少し薄く、内面の底部を全局するように沈線が1条廻る。36~38は土師器坏で、P50からの出土品である。36と38の内外面には、赤っぽい化粧土が少し残り、37の底部には輪積みの痕跡が逆時計廻りに残る。39~41もP50と称した落ちこみからの出土品で、39は須恵器坏蓋、40は灰釉陶器碗、41は須恵器の壺底部片である。接合はできないものの、41と同個体片がP83から出土している。

42~46は全てP58埋土中から出土したもので、42・43は須恵器の坏蓋、44・46は同壺片、45は灰釉陶器である。44の肩部には薄緑色の自然釉がかかり、45の外面および底部にも同様のものが残る。45の高台は平坦で内面に向って少し立ち上り気味を呈する。

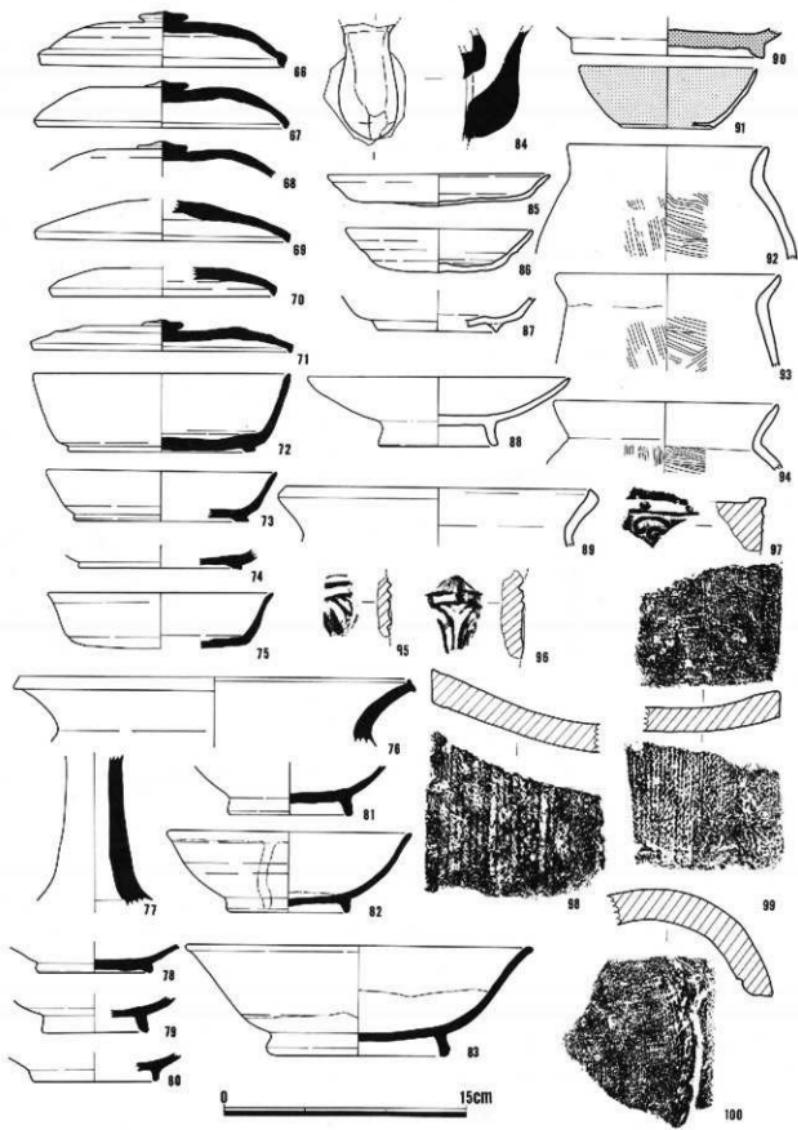
47~50はP60出土品。47・48は土師器坏で、47の内外面には赤い化粧土がわずかに残る。49は須恵器の坏身、50はフイゴの木呂の羽口と思われる。その内面は平滑で、内面と外面の一部はよく火を受け赤化している。51はP65出土の須恵器坏蓋、52はP66から出た須恵器の壺頸部である。その外面には濃い緑色の自然釉がかかる。53はP70出土の綠釉陶器で、遺存度は悪く、表面はほとんどはげている。54は土師器で大きく外方に開く高台を持つ破片である。底部外面にヘソ状の突起が残り、内外面共、ナデて仕上げられているようであるが、器表は荒れていて判然としない。高台端部は折り返して成形されているようである。胎土は赤褐色を呈する。55は須恵器の坏である。



第21図 H区、I区（土壤）出土遺物



第22図 I区(土壤)出土遺物



第23図 I区D1出土遺物

56～60はP80の出土品。56～58は土師器坏で、57と58の内外面に赤い化粧土が一部残っている。59は須恵器の坏蓋、60も須恵器の鉢であるが、表面はかなり磨耗している。61はP82出土の土師器坏、62・63はP96出土の須恵器坏身と坏蓋である。63の底部には輪積み痕が残る。

64はP103と称した掘立柱建物跡（B3）の柱穴掘方内埋土中から、土師器の細片と共に出土した石製鉗帶で、四方に径2mmの大いな小穴を2個ずつ配する。3.8×4.0cm、厚さ6mm前後、裏面が表面上り平滑で、端部は裏面に向って斜めに面取られている。石材は灰白色の地に濃緑色の斑模様が入り、肉眼的にはアップライトあるいは砂岩と思われる。

65はP125から出土した縁釉陶器で、内面の底部をめぐるかすかな沈線が認められる。

66～100は全てI区西辺に沿って南北に走る溝中からの出土品である。

66～71は須恵器の坏蓋で、67のつまみは焼けひずみのため、一部傾いている。71の外側天井部には1条の沈線が廻る。72～75は須恵器の坏身で、72の内面底部は乱ナデで、高台疊付はややくぼんでいる。74の高台も同様である。75の底部にはヘラ起し痕が残る。76は須恵器の壺口縁部片で端面は上下に少し拡張している。77は須恵器の壺頸部片で、頸部から肩にかけて自然釉が残る。

78～84は灰釉陶器で、79と81・83の内面底部近くには点々と釉が付着する。82の内面にはゴマハゲが多く見られる。胎土は共に灰白色を呈し、いわゆる東濃産といわれるものに近い。84は注口部片で、濃緑色の釉が副部との境目付近に付着する。

85～89は土師器で、85の皿の口縁端部内面には1条の沈線がめぐるようである。87の高台は逆三角形の張り付けで、剥離しかけている。88は外方に張り出すしっかりした高台を備え、外面は高台の一部にまで赤褐色の化粧土がわずかに観察できる。89の口縁部片は、その端部内面がわずかに肥厚、つまみ上げ気味である。

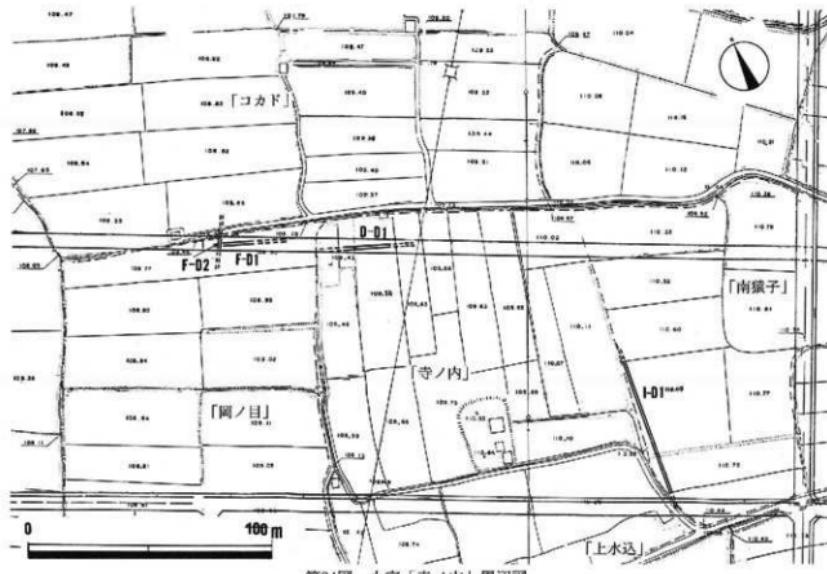
90は縁釉陶器で、器表は荒れ、釉はかなり剥げている。現状では、いわゆる高台内端の段は認められないが、器表の磨耗が激しく元は段があったような形状である。91は黒色土器で、小さな断面逆三角形の高台が付くが、きれいに成形できおらず、ぼこぼこしている。内外面および胎土中ほどまで、黒灰色にいぶされている。器面調整は横方向の磨きであるが、よく図示し得ない。口縁端部内面に1条の筋の痕跡が認められている。

92～94は土師器の壺口縁部片で、全て外面はタテハケ後のナデ、内面は荒いヨコハケ調整される。口縁部はヨコナデである。

95～97は軒瓦で、95・96は軒丸瓦、97は軒平瓦の小破片である。95・96共に蓮弁の外縁近くの一部のみで、裏面も剥離して厚さも薄くなっている。96にはあまり高さをもたないものの圓線らしきものが見え、外区内縁部には珠文と思われるものも認められる。97は外縁とその内側の珠文および唐草文の一部が見られ、上面の幅1cmばかりの突出部分はナデされているが、一段下った面には布目が残存する。軒瓦類は全て焼きが甘く、胎土も肌色を呈し、二次的に破碎された可能性が大きい。

98・99は平瓦、100は丸瓦片であるが、器表の磨耗が激しい。平瓦は凸面は、繩目叩きしその後のナデが施されているもので、内面には布目が残る。端面はヘラ削りされ、その形状から一枚作

りと思われる。丸瓦の凸面も繩目叩きの上からナデられているようであるが、詳細は不明である。端面はヘラ削りされ、端面と凹面との境は丸くナデて面取りが施されている。また凹面の布目に端面近くで、その緩じ合せ痕が観察できる。この他、平瓦・丸瓦は数10個体分、D 1 から出土したが、全て細片で、二次的な破碎と火を受けたようなものばかりであった。また先述のように、明らかに細かな焼土塊と思われるものも大量に出土している（第21図、第22図）。



第24図 小字「寺ノ内」周辺図

### 3. まとめにかえて

これまで、犬上川左岸扇状地における古代集落の展開と水田開発の過程は、竪穴住居と掘立柱および溝・畦畔等の主軸方位の中で説明されてきた。

以下、簡単に要約すると、7C中葉以降の集落の展開と竪穴住居の普及、8C前葉のN27WとN21Wを軸とする竪穴住居と掘立柱建物の併存、8C中葉のN14Wを軸とする竪穴住居の小形化、8C後葉の掘立柱建物の普及と古地割と言われるN5Wに軸をあわせた南北地割、そしてそれ以降N27EやN15Eに東傾していき、10C末から12C後葉にかけてのN27~28Eという扇状地北部での方格地割に合致していくというものであった。

今回のAとD1・D2という平行する2つの溝は、6C末の遺物を中心にしながら新しい遺物もその埋土中に含むが、D2東端での遺物がほぼ溝に伴うものであるため、N80Eを指す6C代の所産であると言える。それ以降、奈良時代のA×竪穴住居（II1）がN24W。奈良時代公的建物に付随すると思われるI区の溝（D1）およびそれに伴うような掘立柱建物（B2）や柱列（F2、F3、F4）はほぼ南北方向に合わせている（N30E）。ほぼ同じところのN89Wを軸とするH×掘立柱建物（B1）もこれに加えて良いかもしれない。その他、N14EのI×掘立柱建物（B3）、N17Eを指すI区の掘立柱建物（B1）、それにN65W・N66W方向に流れるE×溝（D1）やF区D溝（D1）もあり、なかなか近年の方位の分析の中では説明しきれないものが多い。奈良時代を含めてそれ以降、北から東へ軸を振る遺構も結構あることが今回の調査で明らかになってきた。

特に、I区の西辺に平行する溝と方形の掘方を備えた掘立柱建物は、溝から出土した瓦などから寺院かそれに類する施設を周辺に想定し得る。第24図に見るように、東西方向に細長い周辺の水田地割の中でI区の西に接する一画だけ南北方向に水田区画が走り、一町四方程度の範囲が浮き上ってくる。そしてその中央南寄りに約30×20mの基壇状に下之郷火葬場が残っている。この一画を「寺ノ内」と言う。今、その周囲の溝だけ図示したが、なかなか明確なこの一帯を画するように復元はできないが、I区の溝中の土器を見ても奈良時代中葉以降、平安時代中ごろ（10C）までの遺物を含んでおり、瓦も奈良時代の所産である。瓦等の再利用を受けた痕跡があるものの、この犬上川左岸扇状地の開発の拠点となつた寺院あるいはそれに類する公的施設の存在を考えておいて良さそうである。

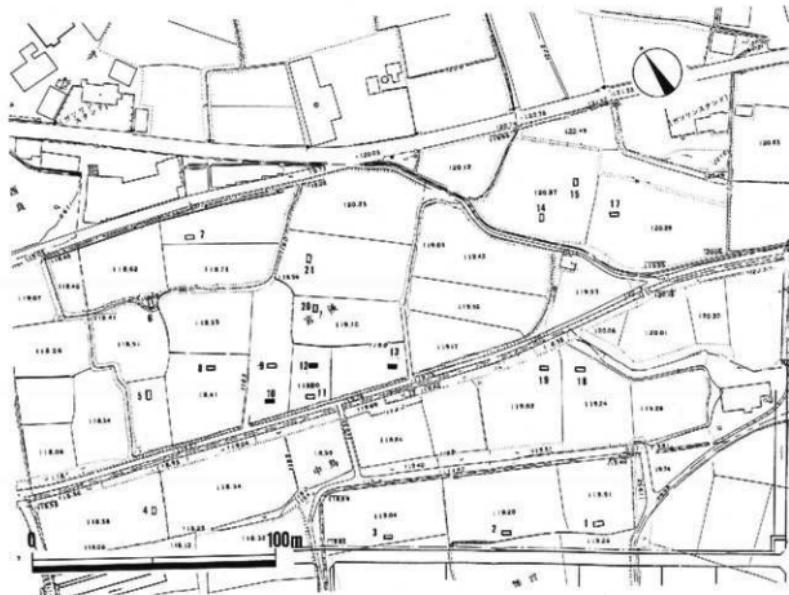
### III. 法養寺遺跡

#### 1. 調査の経過

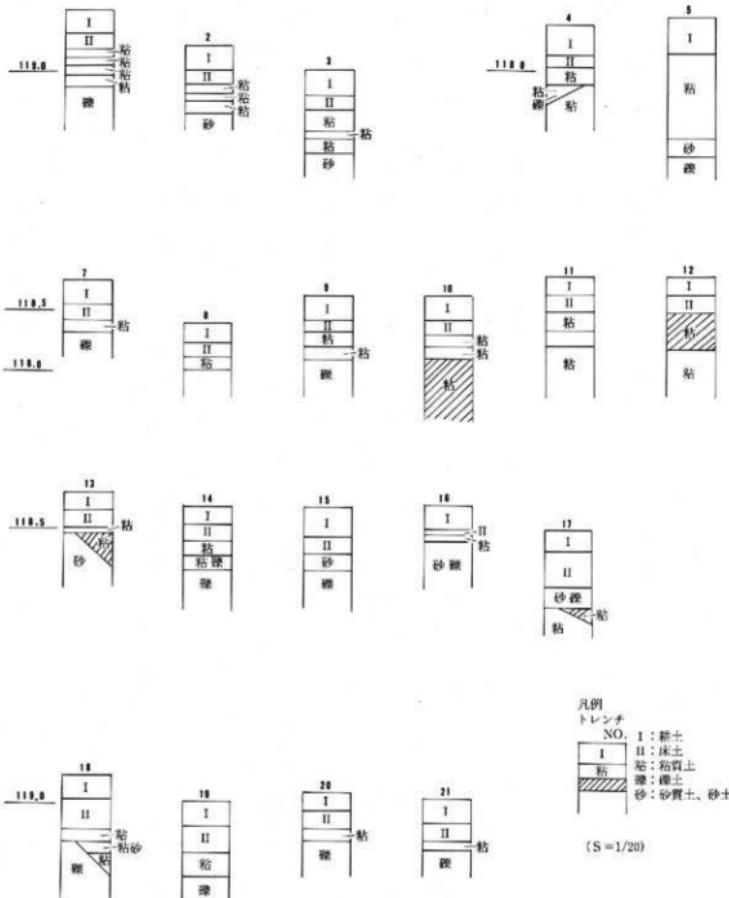
平成元年度県営ほ場整備甲良南部地区法養寺工区は、甲良町役場の南を東西に走る県道敏満寺野口線のさらに南の地域で、甲良町法養寺地先にある。

工事計画に基づいて、遺跡の範囲と工事による埋蔵文化財への影響の有無を確認するため、試掘調査を平成元年1月31日から同2月3日までの間に実施した。調査は排水路工事計画部分と田面の切土計画部分を中心に、試掘レンチを21個所設定し、No10、12、13の3個所において須恵器および土師器を包含する層位と一部、落ち込みを検出した。この結果をもとに県教育委員会は農林部と保存協議に入り、第2号小排水路の延長約65m部分について、やむなく工事着手前に発掘調査を実施することになった（第25図、第26図、第27図）。

現地での発掘調査は平成元年8月4日から8月10日にかけて実施し、平成2年3月末までの間に整理調査を随時行なった。



第25図 試掘調査トレンチ配置図

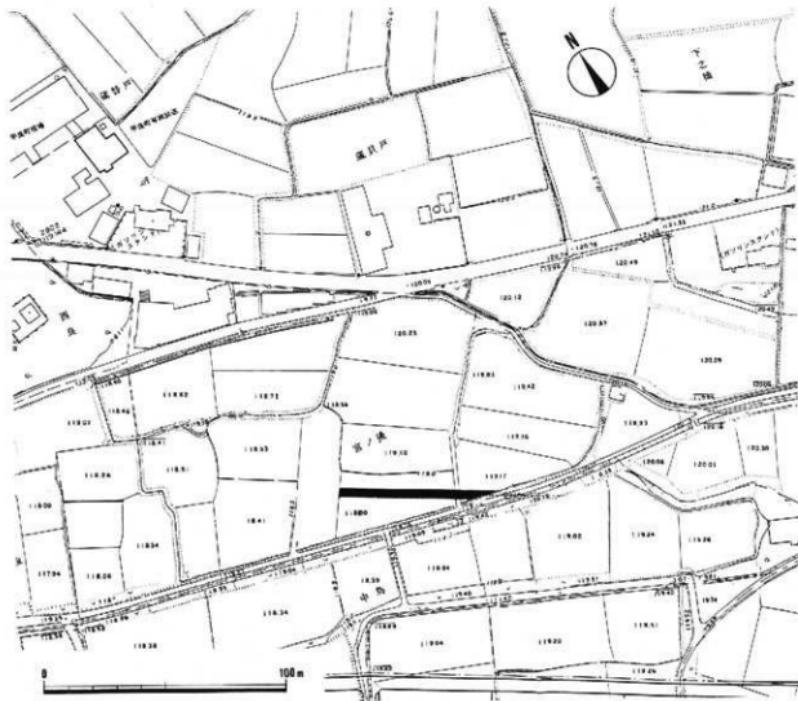


第26図 試掘調査トレンチ土層柱状図

## 2. 調査の結果

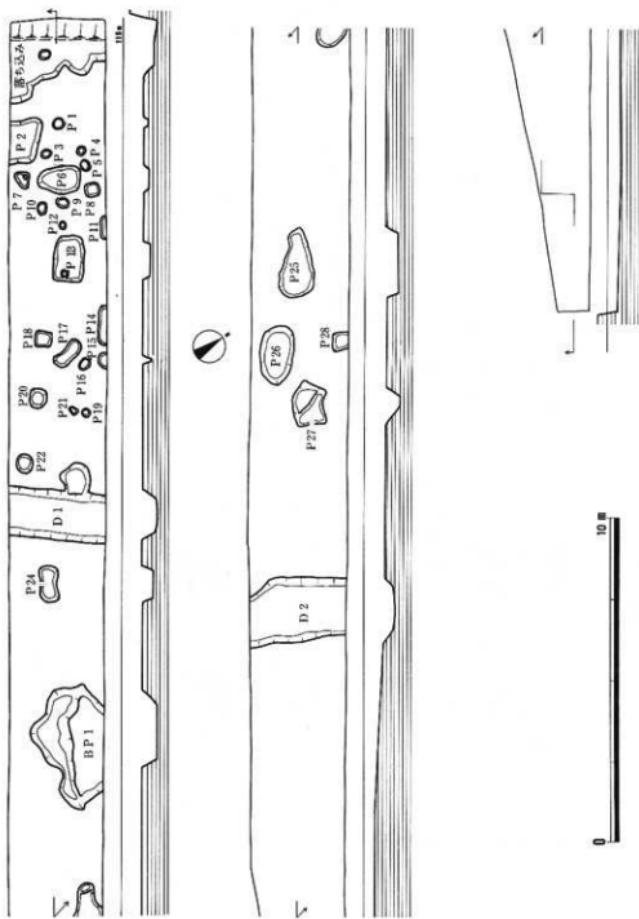
遺構 当該地は、表土（耕土：30～35cm）と床土（灰黄色粘質土：10～12cm）を除去すると茶褐色土が広がり、この面から溝と土壙が掘り込まれていた。この遺構面上からは須恵器、土師器、黒色土器および陶器類が混って検出され、遺構内にも相当混在していることが予想された。

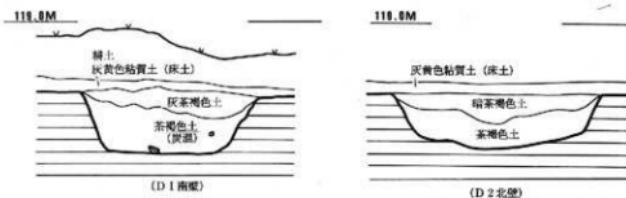
トレンチ西端はベースが落ちこんでいき、この灰色粘土の埋土中から須恵器环身、土師器の皿および青磁碗、近世の陶器、染付類が出土した。またトレンチ中ほど溝（D 1）、東寄りでも溝（D 2）が検出された（第28図）。



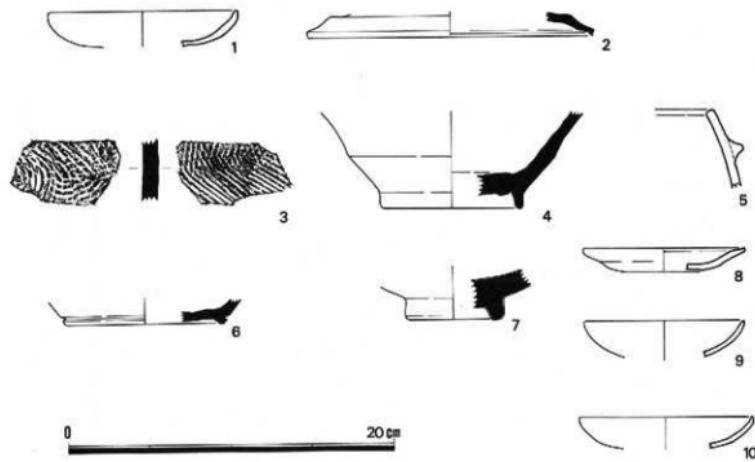
第27図 発掘調査トレンチ

第26图 潘市区遗構圖





第29圖 D 1 南壁、D 2 北壁斷面圖



第30圖 法養寺遺跡出土遺物

なお、D 2 から東は10~20cm大の河原石を多く含む砂礫土がベースとなってしまう。

D 1 は、幅1.50~1.55m、深さ40cmで、断面は逆台形を呈する。方位はN38°Eを指し、溝の底部では、造構のベースとなっている土層中に含まれていた平均10~20cm大を中心とする河原石が多数露出した。D 1 の埋土中からは、須恵器の坏蓋、土師器の皿、白磁碗片および陶器類が出土し、溝底から土師質の土釜片が検出された（第28図）。

D 2 は幅およそ1.80~2.00m、深さ30cmのD 1 に比べやや浅い溝である。溝の主軸はN32°Eを指し、D 1 とは6°ほどずれる。この溝内埋土からは、須恵器の壺、土師器の壺片が出土し、比較的新しい時代のものは認められなかった（第29図）。

その他、最大径3.95mを測る大形土壙をはじめ、0.2~1m前後の規模をもつ種々の土壙が検出されたが、その輪郭は今一つ明らかでなく、その性格等も不明であるが、遺物はほとんどの土壙内埋土に含まれており、B P 1 およびP 6、P 22~26は近世以降の遺物も混じっていたが、他の土壙群の大半は、土師器皿片だけを含んでおり、一部須恵器片もそれに加わった状況であった。

遺物 1、2 は造構面出土で、1 は土師器皿、2 は須恵器の坏蓋で、共に小片である。3、4 はD 1 の埋土中出土のもので、3 は須恵器の壺脛部片、4 は須恵器の壺底部片である。4 の胎土は1~3mm大の砂を多く含み、少し荒く見え、底近くの外側のヨコナデも荒い。5 はD 1 の底から検出されたもので、土釜片である。内外共暗灰色を呈する小片である。6、7 はトレンチ西端の落ち込み内埋土中からのもので、6 は須恵器坏身底部片、7 は青磁碗である。7 の底部に見える鉄足はその幅4mm以上あり、しっかりしたものである。8 はP10、9 はP13、10 はP25出土の土師器痕跡がみられる。全て小片である（第30図）。

# 図 版



調査前近景



調査状況（A区）



A区遺構検出状況（北西から）

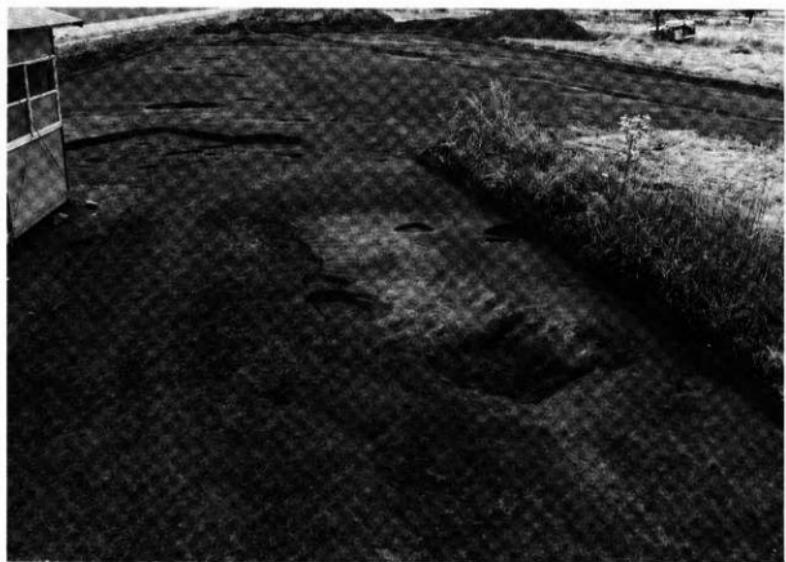


A区遺構（北西から）

図版三  
下之郷遺跡



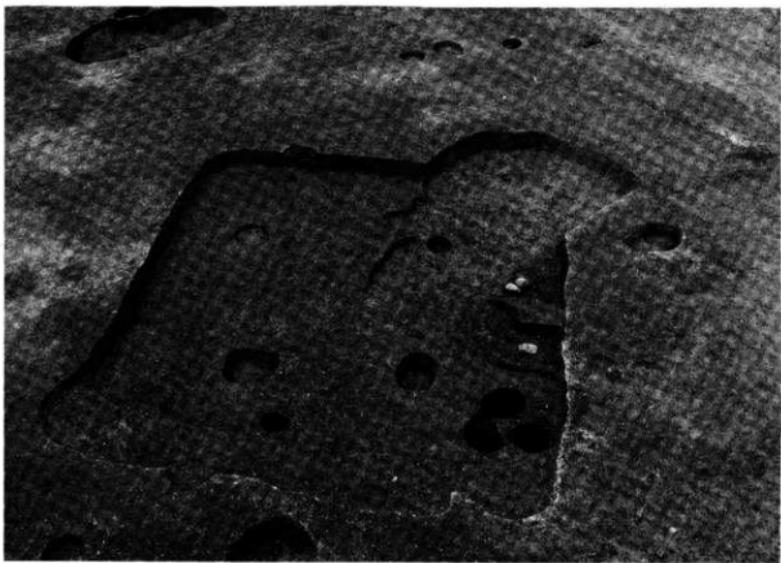
A区D1、D2（南東から）



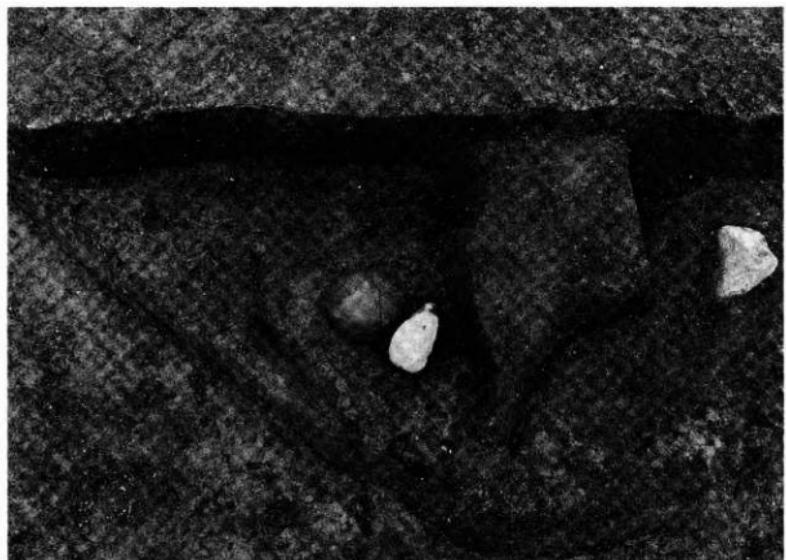
A区遺構（南東から）



A区プレハブ跡地（南東から）



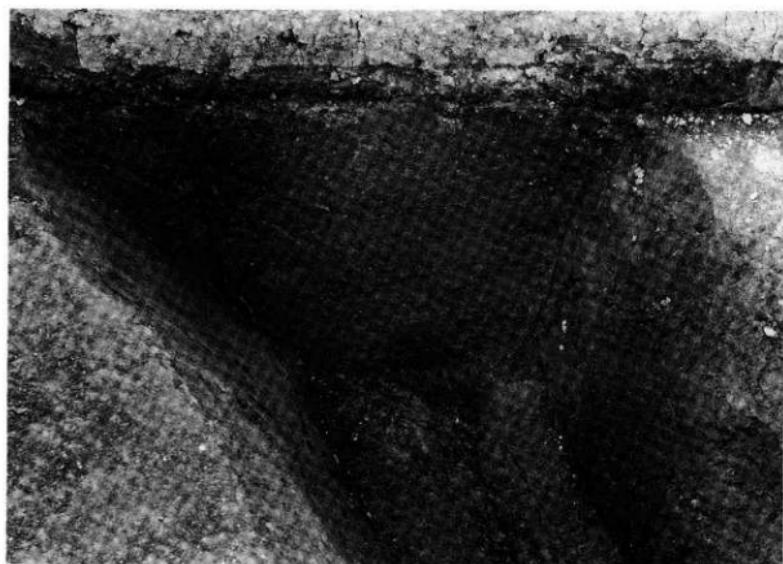
A区H 1（南東から）



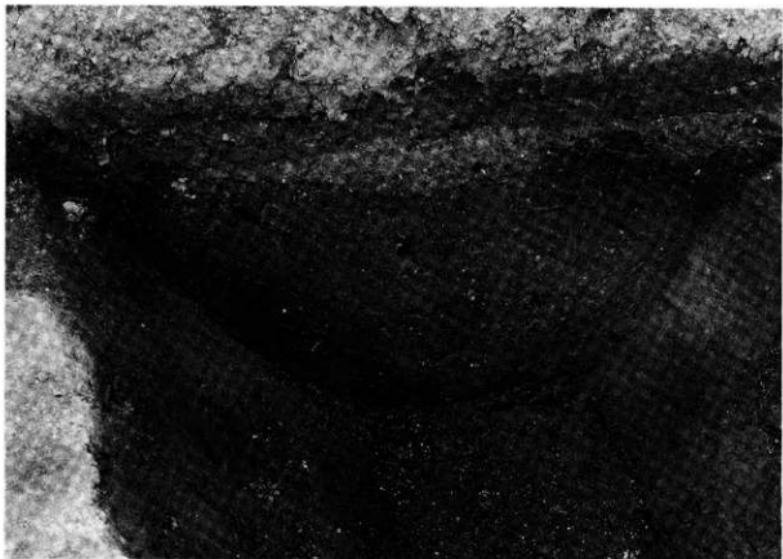
A区H 1 カマド(1)



A区H 1 カマド(2)



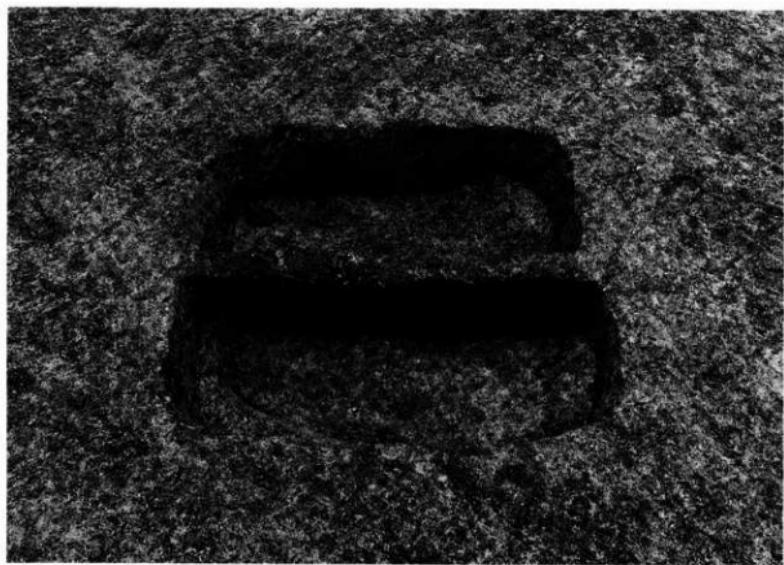
A区D 1（南流）西端



A区D 1（北流）西端



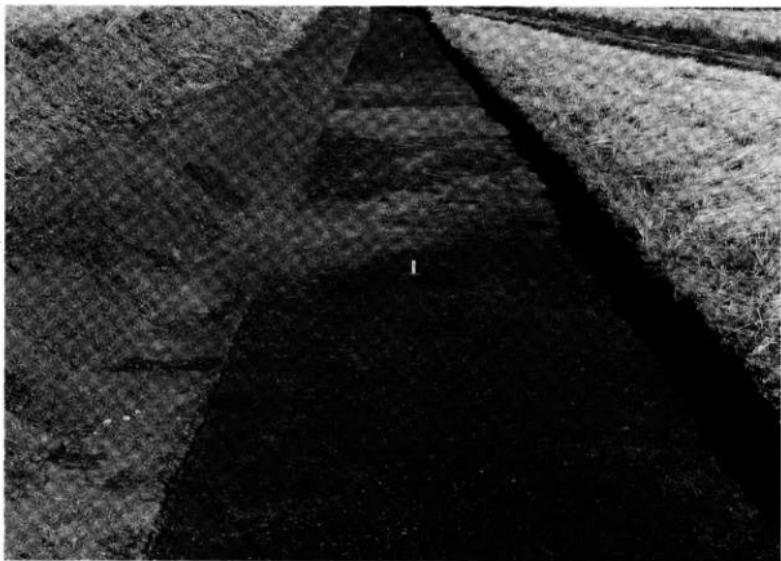
A区FP1



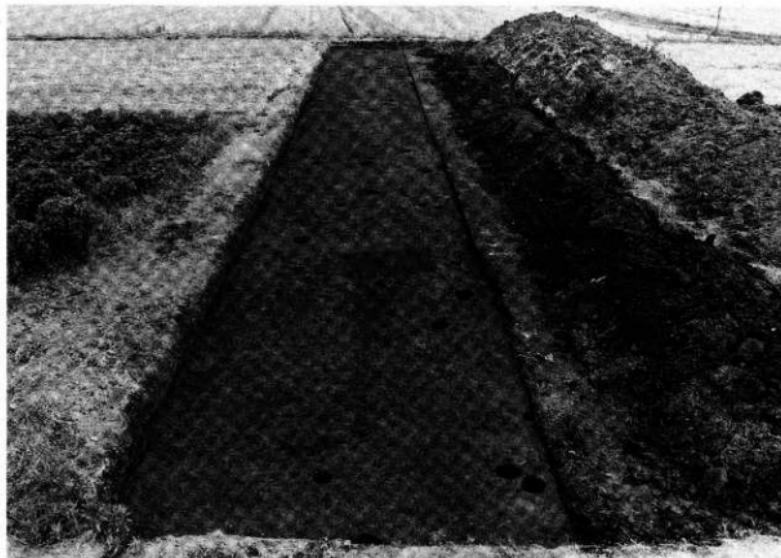
A区FP2



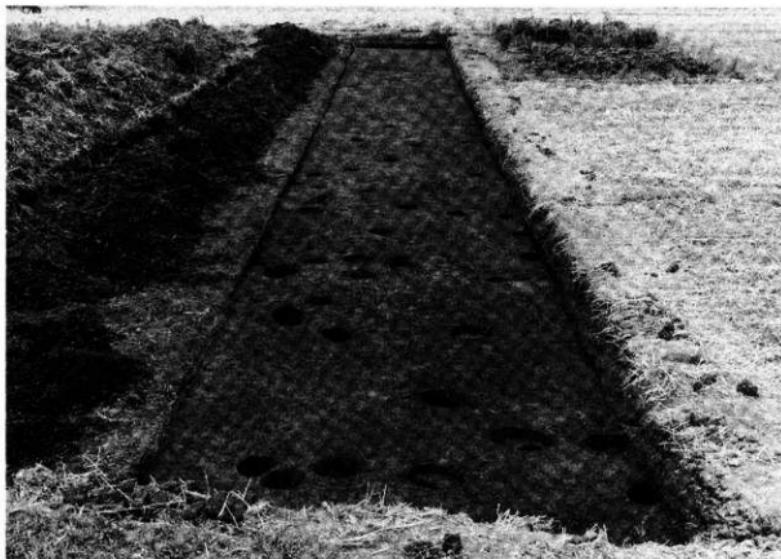
B区遺構（南東から）



B区遺構（北西から）



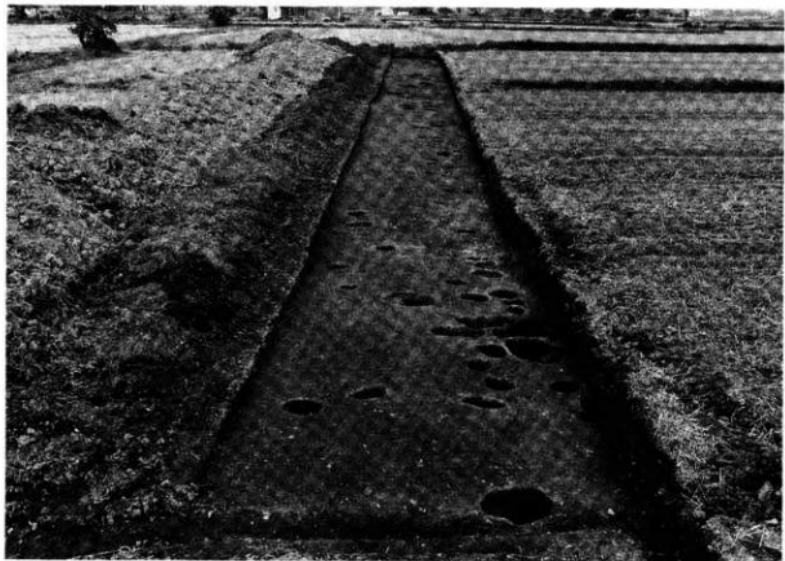
C区遺構（南東から）



C区遺構（北西から）



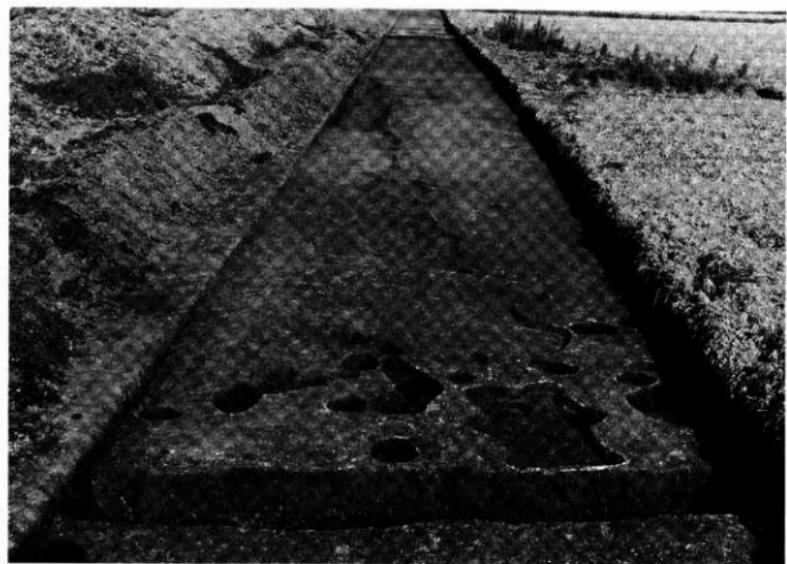
D区遺構（南東から）



D区遺構（北西から）



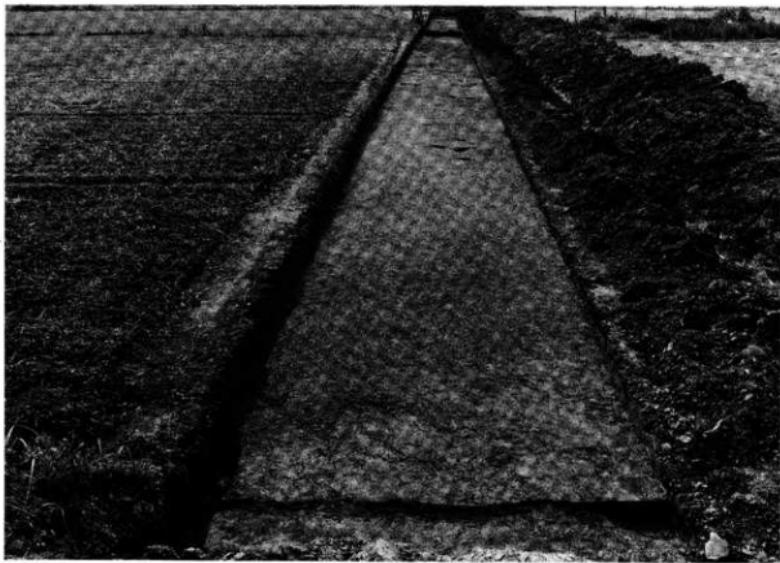
E区遺構（南東から）



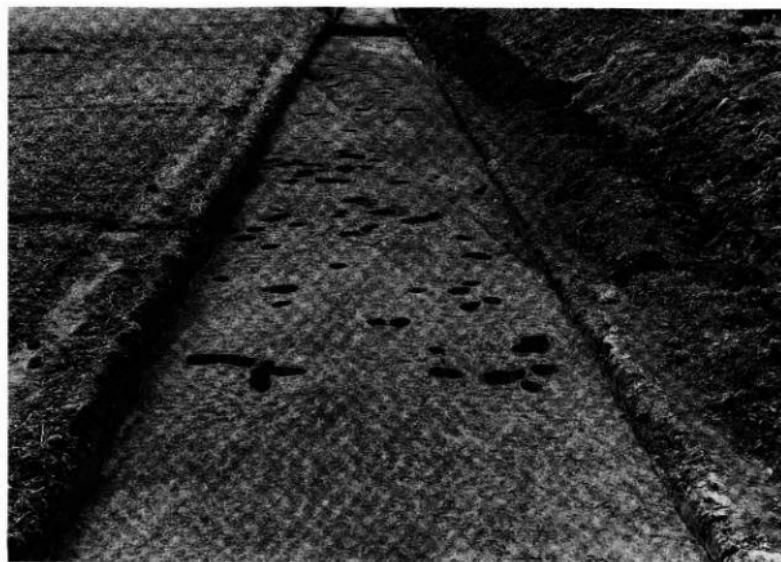
E区遺構（北西から）



E区遺構西半（南東から）



F区遺構(1)（南東から）



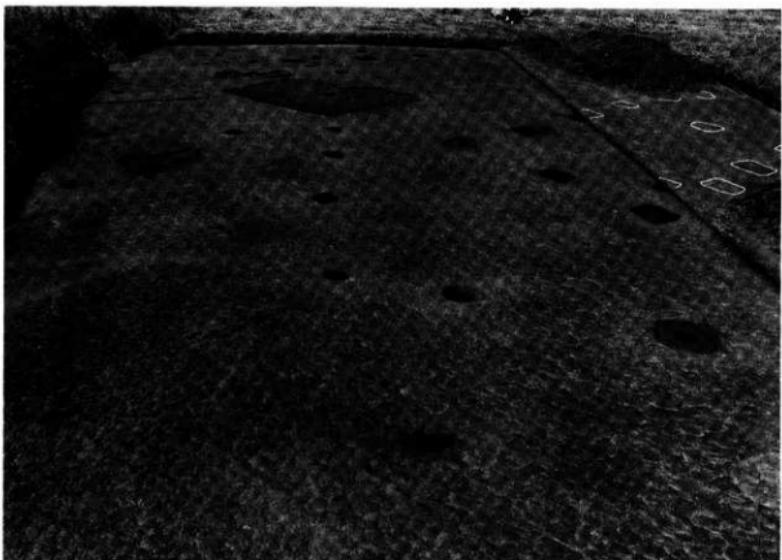
F区遺構(2) (南東から)



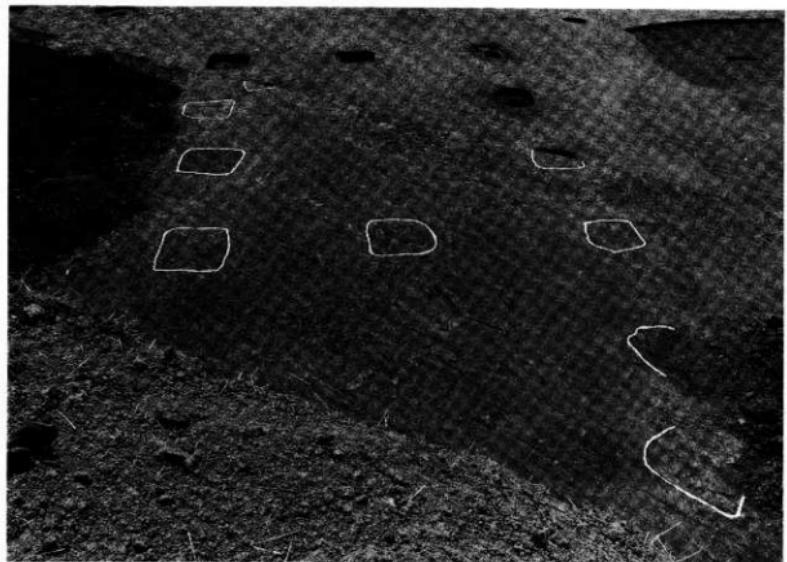
G区遺構 (南東から)



H区遺構北半（南東から）



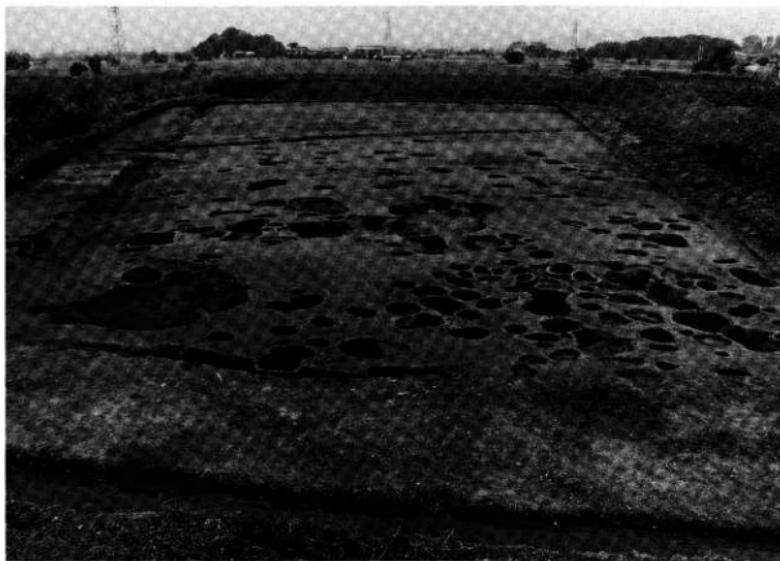
H区遺構（南西から）



H区B1 (東から)



H区P7 土器出土状況



I 区遺構（南西から）



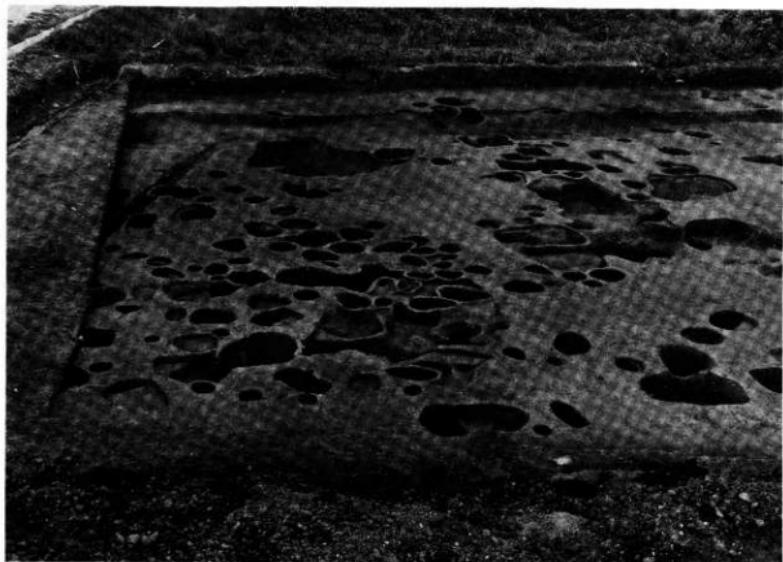
I 区遺構北半（南から）



I区遺構東半（南西から）



I区遺構西半（南西から）



I区遺構南端（南東から）



I区遺構北端（北から）



I区D1北半（南西から）



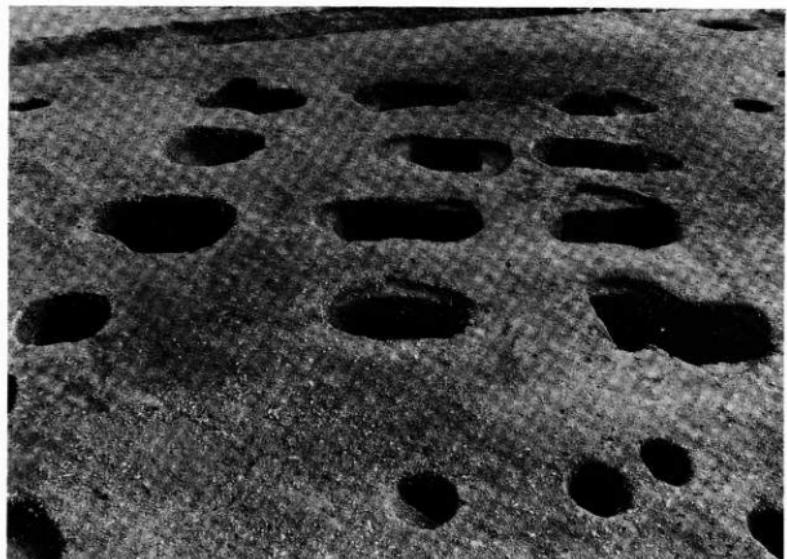
I区D1南端（南西から）



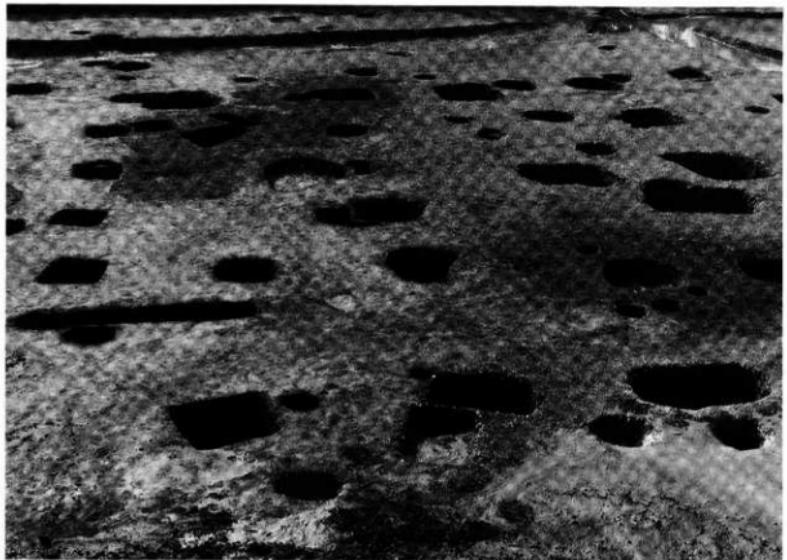
I区D1と火葬場との位置関係（南から）



I区D2（東から）

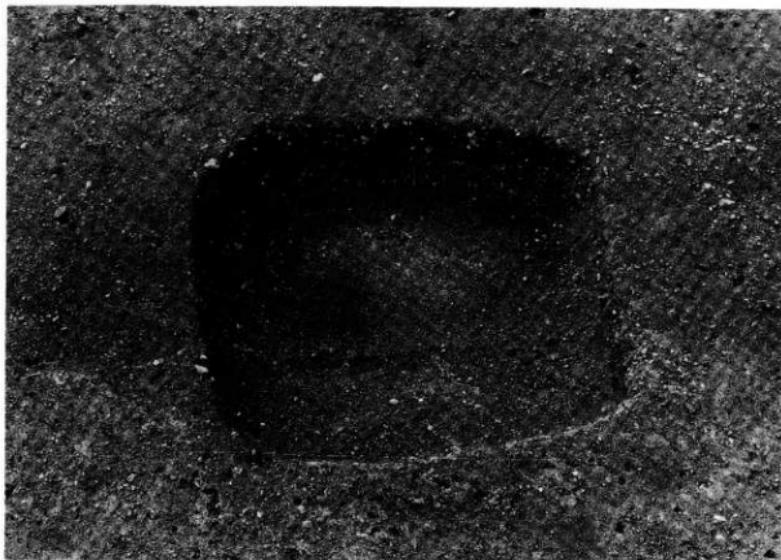


I区B 1 (北東から)

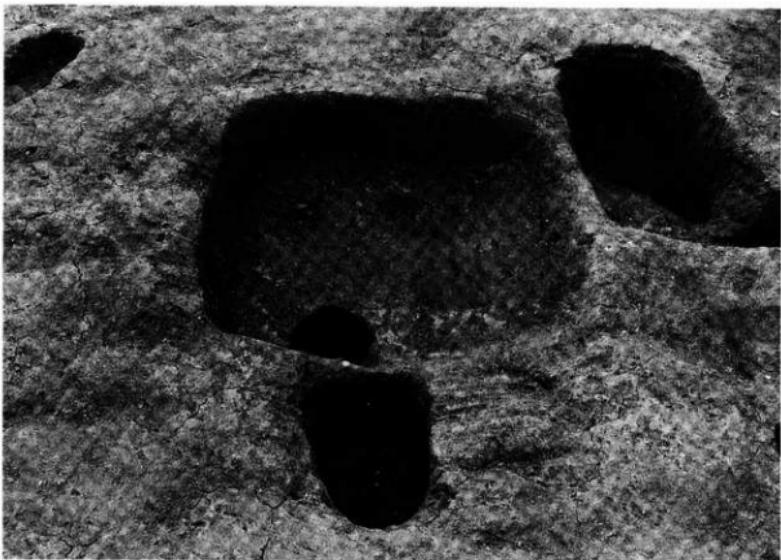


I区B 2、B 3 (南東から)

図版二十二 下之郷遺跡



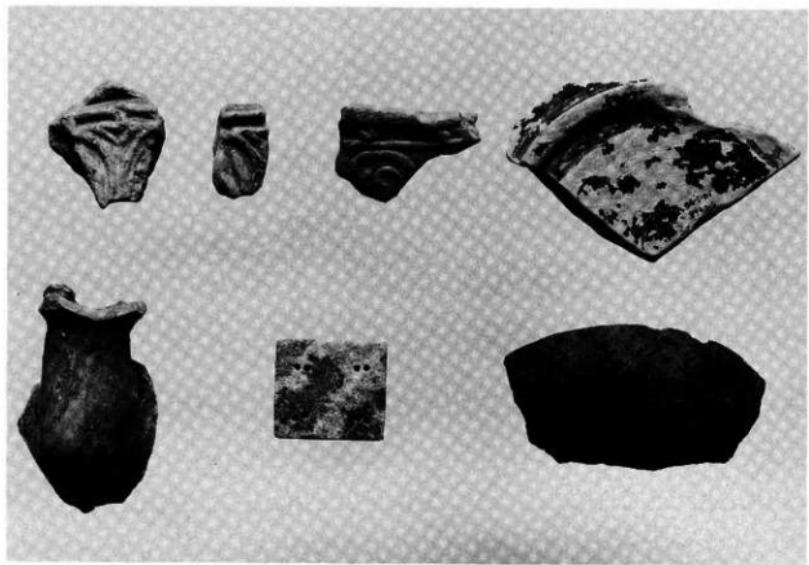
I区FP1



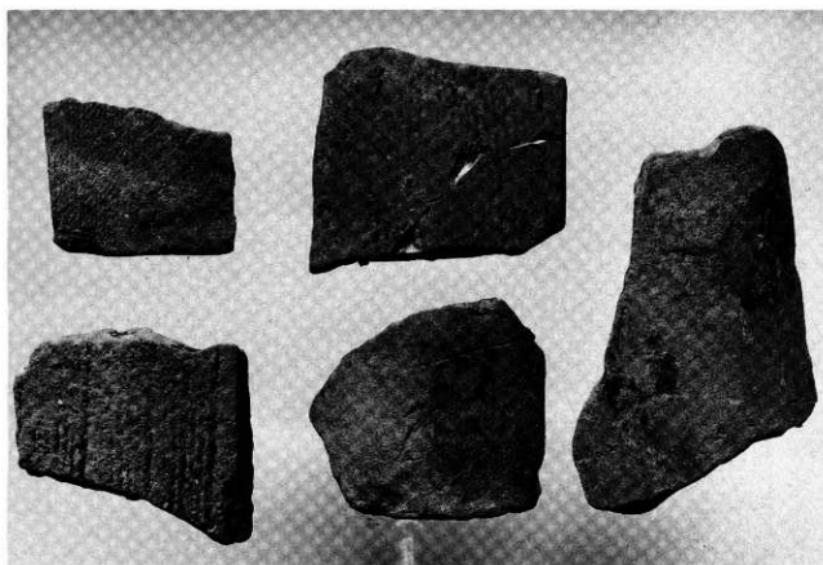
I区FP2



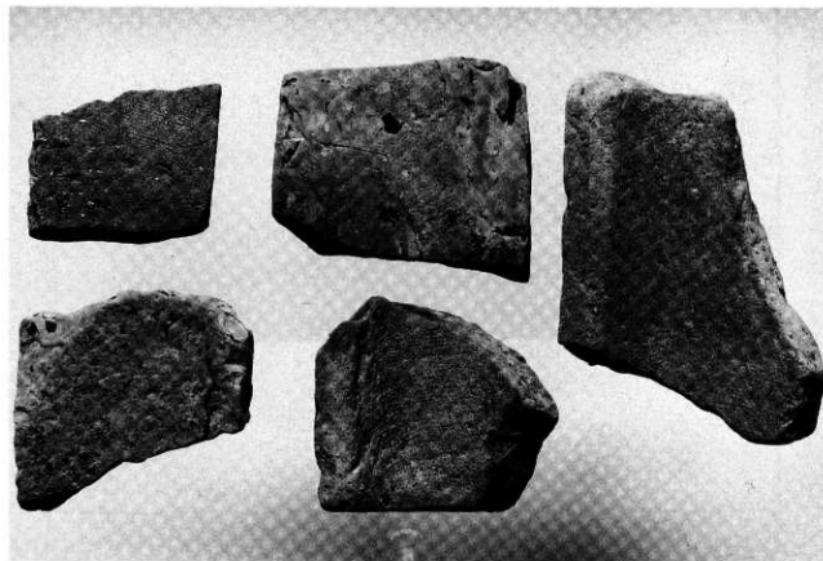
I 区西の下之郷火葬場（字「寺ノ内」）



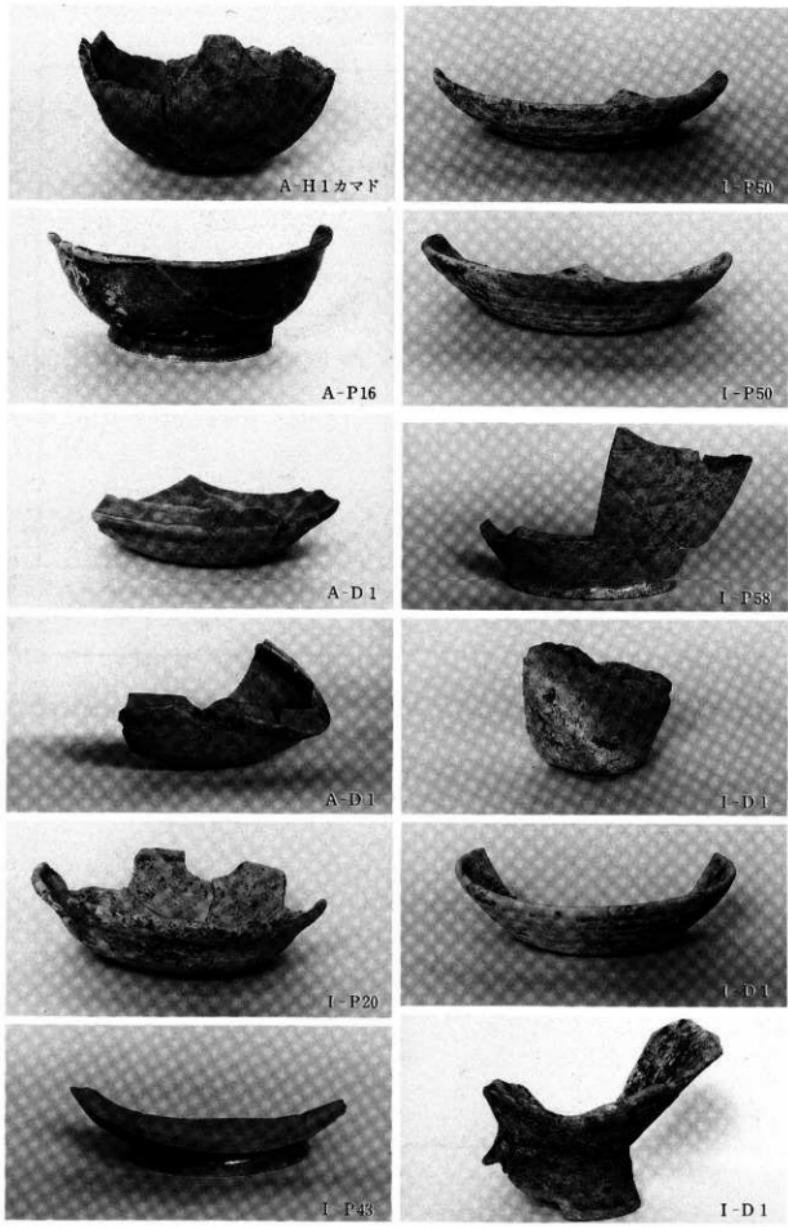
I 区D1出土遺物（鉢帶はP103）



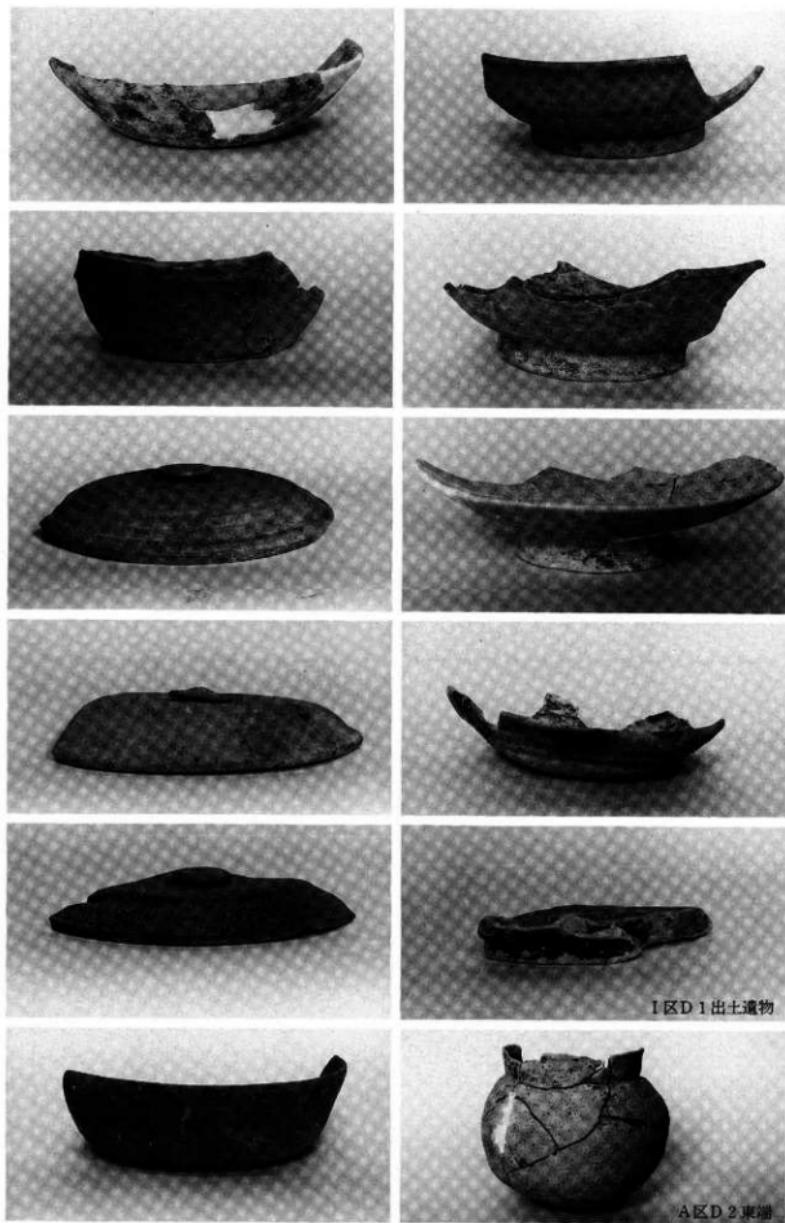
I 区 D 1 出土瓦(1)



I 区 D 1 出土瓦(2)



圖版二十六 下之鄉遺跡



図版二十七 法養寺遺跡



調査前近景



調査状況



遺構（北西から）

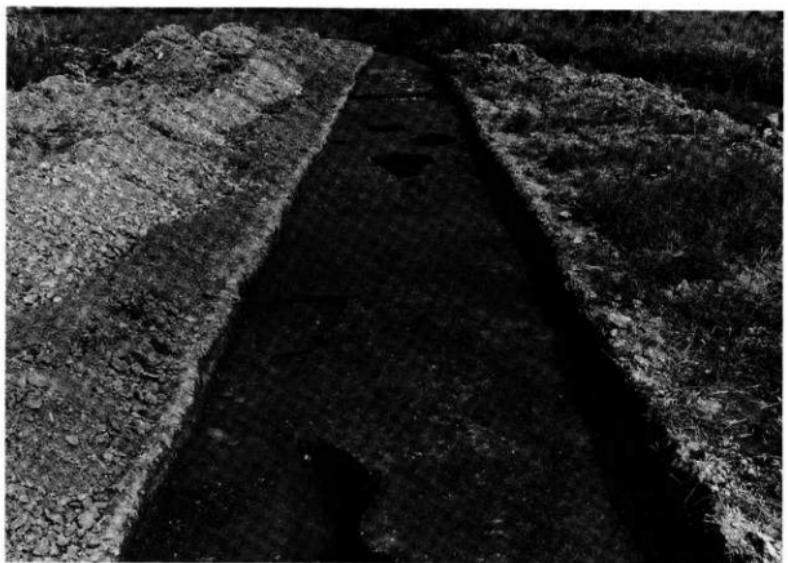


遺構（南東から）

図版二十九 法養寺遺跡



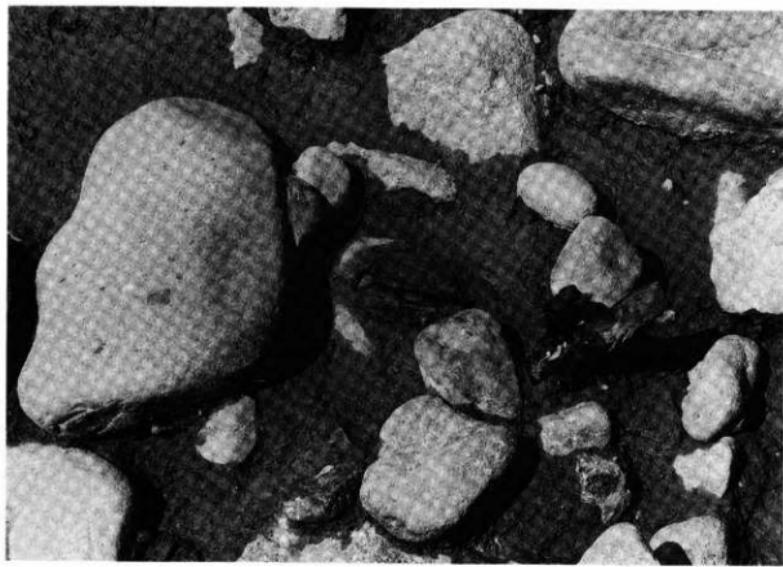
遺構西半（南東から）



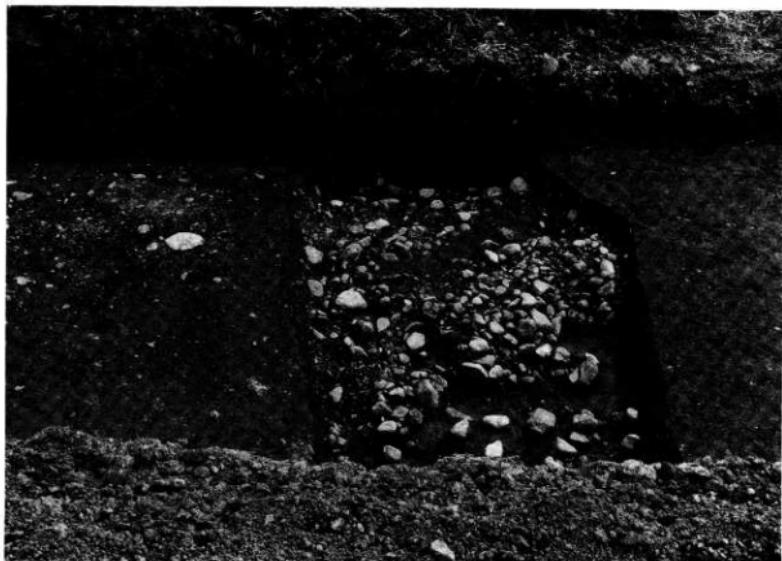
遺構東半（北西から）



D 1 (北から)



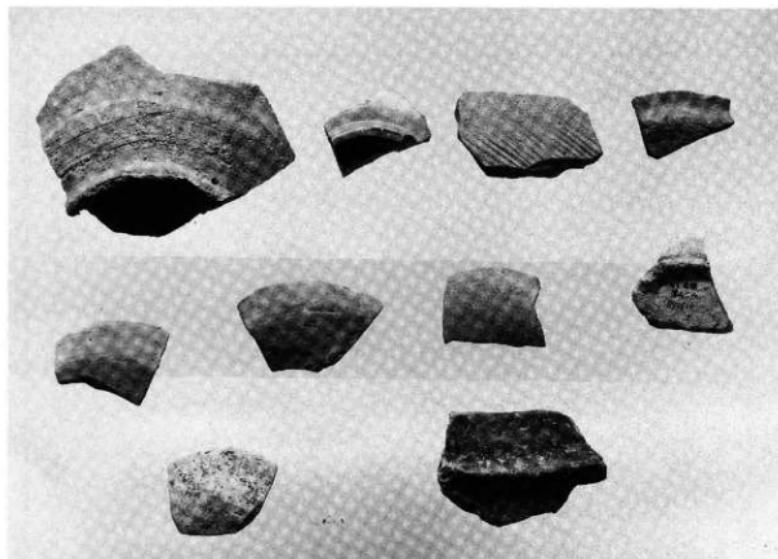
D 1 底遺物出土状況



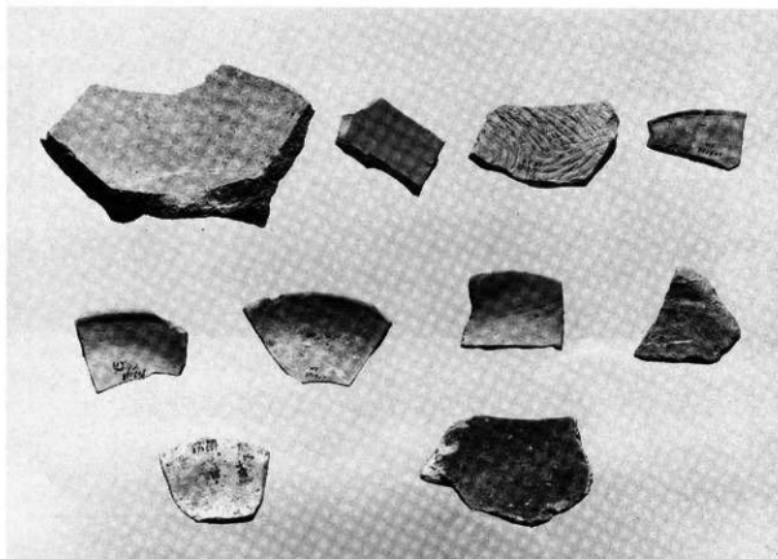
D 2 (南から)



西端落ち込み (東から)



出土遺物(1)



出土遺物(2)

平成2年3月

『は場整備関係遺跡発掘調査報告書 XVII-4』

下之郷遺跡・法養寺遺跡

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課

大津市京町四丁目1-1

電話 0775-24-1121内線2536

(財)滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

電話 0775-48-9781

印 刷 宮川印刷株式会社